

みなみなかばる
南中原第1遺跡(二次)

Minaminakabaru 1 Site

東九州自動車道(都農～西都間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書61

2008

宮崎県埋蔵文化財センター



調査区を南から撮影



調査区全景（直上より）



B区北壁土層断面（南から）

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載した南中原第1遺跡（二次）は、平成18年度に発掘調査を行い、旧石器時代の礫群、縄文時代早期・後期の集石遺構・土坑、古墳時代から古代にかけての竪穴住居跡などの遺構、縄文土器・弥生土器や石核・石鎌・石斧・石錐等の遺物が確認できました。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成20年8月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 福永 展幸

凡 例

- 1 本書は、平成18年度に実施した東九州自動車道（都農～西都間）建設に係る南中原第1遺跡（二次）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となつたが、本報告書中では日本道路公団として記載する。
- 3 現地での実測・写真撮影等の記録は、島木良浩、山田洋一郎、土屋雄毅、田中達也、小船井順、児玉幹、福田光宏が行い、一部について発掘作業員が補助した。
- 4 測量・空中写真・自然科学分析は、次の機関に委託した。

4級基準点測量・グリッド設定 : (有) タイユー測量設計
空中写真 : (有) スカイサーベイ九州
自然科学分析 : (株) 古環境研究所

- 5 整理作業は、遺物洗浄、注記、接合、実測及びトレースを宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・遺物実測及びトレースについては整理作業員の補助を得て、土屋が行った。石器実測及びトレースは、(株) 九州文化財研究所に委託した。
- 6 本書で使用した遺物写真は土屋が撮影した。
- 7 土器及び土層の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準拠した。
- 8 本報告書で使用する略号は次のとおりである。

K-Ah=鬼界一アカホヤ火山灰 Kr-Kb=小林軽石 AT=姶良Tn火山灰 SA=竪穴住居跡
SI=礫群・集石遺構 SC=土坑 SE=溝状遺構 SG=道状遺構 Gr=グリッド

- 9 本書で使用した位置図は国土地理院発行の5万分の1図をもとに、遺跡周辺地形図等は、日本道路公団宮崎工事事務所から提供の1,000分の1図をもとに作成した。
- 10 本書で使用した方位は主に磁北（M. N.）である。また、標高は海拔絶対高である。
- 11 国土座標は、改訂前の旧平面直角座標系II（日本測地形）である。
- 12 本書の遺構及び遺物実測図の縮尺は次のとおりとする。

遺物実測図 ······ 1/2 · 1/3 遺構実測図 ······ 1/40
土層断面図 ······ 1/40 ※以上を基本とするが、これ以外のものもある。

- 13 本書の執筆と編集は、土屋が担当した。
- 14 出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 15 平成15年度の一次調査の確認調査時に出土した銃剣について、一次調査報告書刊行後に所在が明らかになり、報告されていないことから、今回二次調査の報告書に掲載することとなった。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の組織.....	1
第Ⅱ章 遺跡の環境.....	2
第1節 地理的環境.....	2
第2節 歴史的環境.....	2
第Ⅲ章 調査の経過と方針.....	5
第1節 発掘調査の方法.....	5
1 確認調査.....	5
2 本調査.....	5
3 日誌抄.....	9
第2節 整理作業及び報告書作成.....	11
第Ⅳ章 調査の記録.....	13
第1節 基本順序.....	13
第2節 旧石器時代の遺構と遺物.....	15
第3節 縄文時代の遺構と遺物.....	17
第4節 古墳時代以降の遺構と遺物.....	38
第5節 近・現代の遺物.....	40
第6節 時期不明の遺構.....	41
第Ⅴ章 自然科学分析の結果.....	43
第Ⅵ章 まとめ.....	46

挿図目次

第1図 遺跡位置図.....	4	第17図 環状ピット群実測図.....	23
第2図 確認調査トレンチ配置図.....	6	第18図 道状遺構A群・B群実測図・断面図.....	24
第3図 確認調査出土土器実測図.....	6	第19図 縄文時代出土石器・土器分布図.....	25
第4図 確認調査出土石器実測図(1).....	7	第20図 石籠出土層・石材・法量別分類比較図.....	27
第5図 確認調査出土石器実測図(2).....	8	第21図 縄文時代出土土器実測図(1).....	28
第6図 周辺地形図.....	12	第22図 縄文時代出土土器実測図(2).....	29
第7図 調査区グリッド図.....	12	第23図 縄文時代出土土器実測図(3).....	30
第8図 A区T-③西側・B区北壁土層断面図.....	14	第24図 縄文時代出土石器実測図(1).....	31
第9図 磐群実測図.....	15	第25図 縄文時代出土石器実測図(2).....	32
第10図 旧石器時代調査トレンチ配置図.....	15	第26図 縄文時代出土石器実測図(3).....	33
第11図 旧石器時代石器実測図.....	16	第27図 縄文時代出土石器実測図(4).....	34
第12図 遺構分布図.....	18	第28図 縄文時代出土石器実測図(5).....	35
第13図 集石遺構実測図(1).....	20	第29図 縄文時代出土石器実測図(6).....	36
第14図 集石遺構実測図(2).....	21	第30図 縄文時代出土石器実測図(7).....	37
第15図 集石遺構実測図(3).....	22	第31図 S A 1 実測図及び遺物出土状況.....	38
第16図 土坑実測図.....	22	・土層断面図	

第32図	古墳時代以降出土土器実測図	39
第33図	近現代出土遺物実測図	40
第34図	性格の不明な溝状遺構実測図	41
第35図	溝状遺構実測図及び断面図	42
第36図	一次調査・二次調査集石遺構分布図	47
第37図	各遺跡石錐重量分布図(1)	48
第38図	各遺跡石錐重量分布図(2)	49
第39図	各遺跡石錐重量比較図	49

表目次

第1表	基本層序対照表	13
第2表	集石遺構・散礫観察表	19
第3表	土器観察表	51
第4表	石器計測表	52
第5表	石錐計測表(1)	53
第6表	石錐計測表(2)	54
第7表	石錐計測表(3)	55
第8表	未実測石器計測表	56

図版目次

巻頭図版 1	調査区を南から撮影	
巻頭図版 2	調査区全景	
	B区北壁土層断面	
図版 1	礫群検出状況	57
	S I 1 検出状況	
	S I 1 配石検出状況	
	S I 1 完掘状況	
	S I 2 検出状況	
	S I 3 検出状況	
	S I 4 検出状況	
	S I 2・3・4 検出状況	
図版 2	S C 1 完掘状況	58
	S C 2 完掘状況	
	S C 3 完掘状況	
	S I 5 検出状況	
	散礫出土状況	
	S G A群 検出状況	
	S G B群 検出状況	
	S A 1 遺物出土状況	
図版 3	S A 1 完掘状況	59
	S E 1・S E 2 検出状況	
	S E 1・S E 2 完掘状況	
	S E 2 矮出土状況	
	S E 1・S E 2 土層断面	
	環状ピット群完掘状況	
	性格の不明な溝状遺構完掘状況	
	A区確認調査出土土器(1)	
図版 4	A区確認調査出土土器(2)	60
	A区確認調査出土土器(1)	
図版 5	石錐時代出土石器(2)	
	A区確認調査出土石器(3)	
	旧石器時代出土石器(1)	
	旧石器時代出土石器(2)	
	縄文時代出土土器(1)	
	縄文時代出土土器(2)	
図版 6	縄文時代出土土器(3)	61
	縄文時代出土土器(4)	
	縄文時代出土土器(5)	
	縄文時代出土土器(6)	
	縄文時代出土土器(7)	
	縄文時代出土石器(1)	
	縄文時代出土石器(2)	
	縄文時代出土石器(3)	
図版 7	縄文時代出土石器(4)	62
	縄文時代出土石器(5)	
	縄文時代出土石器(6)	
	縄文時代出土石器(7)	
	縄文時代出土石器(8)	
	縄文時代出土石器(9)	
	縄文時代出土石器(10)	
	縄文時代出土石器(11)	
図版 8	縄文時代出土石器(12)	63
	古墳時代以降出土遺物(1)(2)	
	近・現代出土遺物	
	未実測石斧(1)(2)・未実測敲石(1)(2)	
図版 9	未実測旧石器剥片・未実測石錐	64
	近現代出土遺物	
	炭化材分類顕微鏡写真	65

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西都間）は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となっている。さらに、平成9年12月に建設大臣から日本道路公团へ施行命令が出され、公团では翌年の2月から事業に着手している。その間、宮崎県教育委員会では、平成6年度に延岡～西都間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を行った結果、工事施工によって影響が出る部分については、工事着手前に発掘調査を実施することとなった。調査は、平成11年度より宮崎県教育委員会が日本道路公团の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。

南中原第1遺跡は、平成13年度、15年度、16年度と三度にわたり確認調査を行い、平成17年1月5日から平成17年12月22日まで一次調査として本調査を行った。その後、一次調査で調査できなかった部分の1,500m²を対象に、平成18年11月20日から平成19年3月29日まで、二次調査を行った。整理作業については、平成19年6月から10月まで行った。

第2節 調査の組織

南中原第1遺跡（二次）の調査組織は次のとおりである。

【調査主体】宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉（平成18・19年度）

福永 展幸（平成20年度）

副所長 加藤 悟郎（平成18・19・20年度）

副所長兼調査第二課長

岩永 哲夫（平成18年度）

副所長兼総務課長

長友 英詞（平成20年度）

総務課長 宮越 尊（平成18・19年度）

調査第一課長

高山 富雄（平成18年度）

長津 宗重（平成19・20年度）

主幹兼総務担当リーダー

高山 正信（平成18・19・20年度）

調査第一課

主幹兼調査第一担当リーダー

長津 宗重（平成18年度）

副主幹兼調査第一担当リーダー

南中道 隆（平成19・20年度）

主幹兼調査第二担当リーダー

菅付 和樹（平成18・19・20年度）

（調査・報告書担当）

調査第一課調査第二担当

主査 土屋 雄毅（平成18・19・20年度）

（調査担当）

調査第一課調査第一担当

主査 山田洋一郎（平成18年度）

調査第一課調査第二担当

主査 島木 良浩（平成18年度）

調査第一課調査第一担当

調査員 田中 達也（平成18年度）

調査員 児玉 幹（平成18年度）

調査員 小船井 順（平成18年度）

調査員 福田 光宏（平成18年度）

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

南中原第1遺跡（二次）は、宮崎県児湯郡高鍋町大字上江字野首に所在する。本遺跡が位置する高鍋町は、日向灘に面した宮崎県沿岸部の中央に位置している。町の大部分の地勢は洪積台地であり、小丸川や宮田川は、この台地地帯を切り分けるように日向灘に東流する。

この洪積台地は、新生第4洪積世に形成された河岸・海岸段丘面であり、東は日向灘に面し、西は茶臼原台地で木城町と接し、北は川南原台地で川南町へ、南は水谷原台地で新富町へ続いている。これらの台地上には、起伏が緩やかな平野が広がり、畠地・集落が点在する。

本遺跡は、小丸川南岸に広がる牛牧台地北部縁辺の東向きの緩斜面に位置し、標高は約35mから約40mである。牛牧台地は、宮崎平野北部の段丘群中の三財原面に相当し、数多くの遺跡が所在する。本遺跡の南には、老瀬坂上第3遺跡が所在する。北には、野首第1遺跡、野首第2遺跡が、東には山王古墳群が所在する。

第2節 歴史的環境

今回の調査においては、後期旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・近現代の遺構・遺物が確認されたが、周辺遺跡や史跡について、旧石器時代から関連する時代について概観したい。

後期旧石器時代として、南中原第1遺跡（一次）では、打製石斧が1点出土している。また、持田中尾遺跡では、横長剥片を素材とするナイフ形石器・角錐状石器・円形搔器（日東産黒曜石製）等が、妻道南遺跡では、疊群が1基検出され、ナイフ形石器（日東産黒曜石製）が1点、剥片・石核等が出土している。

縄文時代として、南中原第1遺跡（一次）では、早期の集石遺構15基、散疊3基が検出され、石鎌・スクレイバー・打製石斧が出土している。縄文時代後・晚期の土坑18基が検出され、貝殻条痕文土器・孔列文土器・磨製石斧・石鎌等が出土している。ま

た、耳截遺跡では、手向山式土器が出土している。妻道南遺跡では、縄文時代早期の集石遺構が5基検出され、貝殻条痕文土器・押型文土器・石鎌が出土している。大戸ノ口第2遺跡では、集石遺構が約45基検出され、円筒形貝殻文土器・押型文土器・塞ノ神式土器・船元式系土器・石斧・円形搔器等が出土している。

弥生時代としては、持田中尾遺跡では、竪穴住居跡2軒などが検出され、下城式の甕をはじめ、壺形・鉢形の土器・磨製石鎌・石劍・石庖丁・磨製石斧・打製石斧・打欠石錐・砥石などが出土した。大戸ノ口第2遺跡では、前期の土坑と後期の竪穴住居跡12軒などが検出され、下城式の甕・瀬戸内系の壺・高坏等が出土した。

古墳時代以降では、周辺に数多くの古墳がみられる。北側対岸の台地に国史跡川南古墳群が、東側の対岸の台地に国史跡持田古墳群がある。北西の台地斜面には老瀬横穴墓群がある。南中原第1遺跡（一次）では、時期は明確ではないが、古代の土師器片や須恵器片が出土している。

近代、第二次世界大戦中には、昭和20年に妻町に本部のあった護路部隊が高鍋に配置され、山手に機関銃座や砲座、待避壕を構築し、上陸米軍を迎撃訓練を行い、谷間や山陰にわか造りの山小屋兵舎が建てられ、牛牧の丘には砲兵隊が大砲を運んできて砲台構築を始めたとの記録が残っている。南中原第1遺跡（一次）では、横穴式の防空壕が確認され、認識票も7枚出土している。

【参考文献】

- 『高鍋町史』 1987
- 『持田中尾遺跡発掘調査概要報告書』
- 1982 高鍋町教育委員会
- 『大戸ノ口第2遺跡』『文化財調査報告書第5集』
- 1991 高鍋町教育委員会
- 『老瀬坂上第2遺跡』『文化財調査報告書6集』
- 1991 高鍋町教育委員会
- 『妻道南遺跡発掘調査報告書』
- 1986 高鍋町教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第76集
『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財
発掘調査概要報告書Ⅲ』2003

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集
『野首第1遺跡』2004

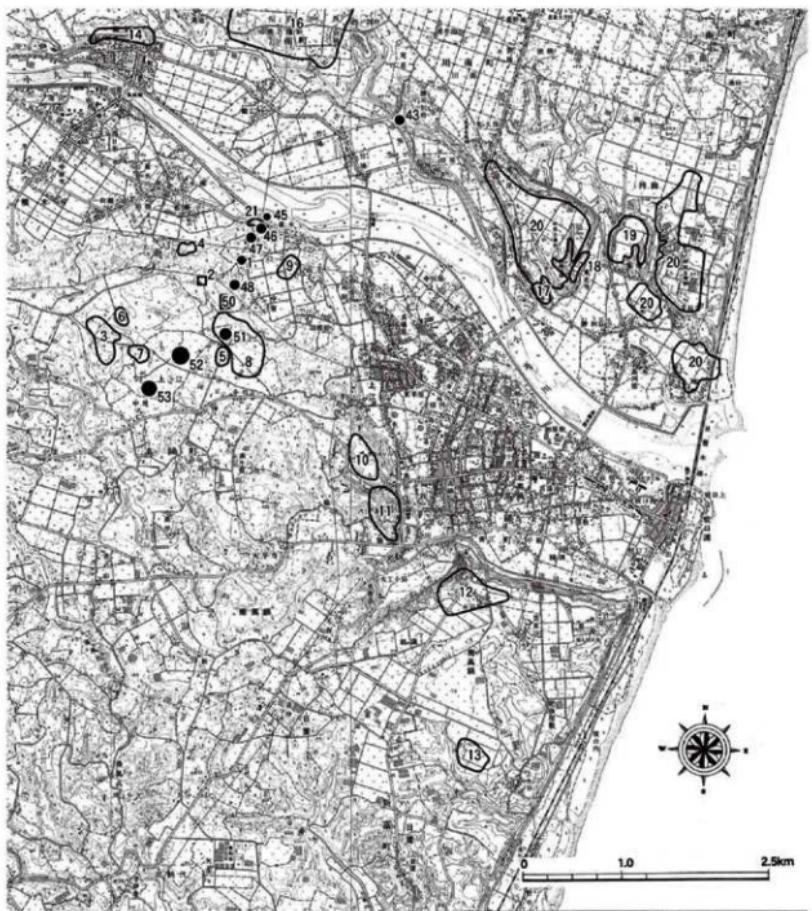
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集
『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財
発掘調査概要報告書Ⅳ』2004

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第111集
『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財
発掘調査概要報告書Ⅴ』2005

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第118集
『老瀬坂上第3遺跡』2005

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第131集
『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財
発掘調査概要報告書Ⅵ』2006

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第162集
『南中原第1遺跡(一次)』2007



- 1 南中原第1遺跡 2 老瀬坂上第2遺跡 3 老瀬坂上遺跡 4 老瀬横穴墓群 5 北牛牧第1遺跡
 6 耳截遺跡 7 牛牧原遺跡 8 牛牧古墳群 9 山王古墳群 10 大戸ノ口第2遺跡
 11 高鍋（財部）城跡 12 水谷原第2遺跡 13 妻道南遺跡 14 高城跡 15 宗麟原供養塔
 16 川南古墳群 17 持田中尾遺跡 18 東光寺遺跡 19 上ノ別府遺跡 20 持田古墳群
 21 野首第1遺跡（県道木城高鍋線高速関連道路・河川等緊急整備事業）
 43 尾花A遺跡 45 崩戸遺跡 46 野首第1遺跡 47 野首第2遺跡 49 南中原第2遺跡
 50 老瀬坂上第3遺跡 51 下耳切第3遺跡 52 北牛牧第5遺跡 53 唐木戸第1遺跡
 テラ 43~53は東九州自動車道関連の遺跡

第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)

第Ⅲ章 調査の経過と方針

第1節 発掘調査の方法

1 確認調査

確認調査は、平成18年11月20日から平成18年12月22日まで実施した。

調査では、調査区の北側鉄塔と鉄塔の間をA区、A区の南側をB区として調査を行った。まず、カルバート工事が入るということから、A区を優先的に調査した。5m×7mのトレンチ(T-①)と6m×10mのトレンチ(T-②)、2.5m×3mのトレンチ(T-③)、2.5m×2.5mのトレンチ(T-④)を設定し、重機で表土を剥いだあと、遺構検出及び掘削を行った。現地形は平坦であるが、客土が厚く、表土より2.5m付近で第IV層に達した。このことから、谷地形をかなり埋めて平坦にしたものと考えられる。遺構については、どのトレンチからも検出することはできなかった。遺物については、第II層及び第III層・第IV層より出土したが、ほとんどは、T-①、T-②のトレンチよりの出土であった。主に、縄文時代後・晚期の土器片が中心で、深鉢の口縁部(第3図1~3)、台付き皿の口縁部(第3図4)が出土している。また、弥生時代の高环の脚部(第3図5)、古墳時代の甕の胴部片(第3図6)・須恵器片(第3図7)も出土している。石器については、石核(第4図10・11)、二次加工剥片(第4図8・9)、円盤状石器(第4図12)、石錘(第5図14・15)、打製石斧(第5図16・18)、敲石(第5図17)が出土した。第V層から第VII層まで掘り下げていったが、第VII層上でチャートの石錐(第5図13)が1点出土しただけであった。第IX層以下は、遺構・遺物が確認されず、礫層までで調査を終了した。A区は、確認調査の結果、本調査から除外することになった。

B区では、T-①からT-⑦の7本のトレンチを設定し、調査を行った。重機で表土剥ぎを行ったあと、遺構検出及び掘削を行った。T-②、③、④のK-Ah(第IV層)、NB0(第V層)にて、道状遺構と思われる硬化面を検出、またT-③では、住居跡ではないかと思われる土器片等の遺物集中地点を検出、数多くの土器や石錘などの石器が出土した。よっ

て、工事用道路建設のために調査したT-⑥を除いて、引き続き調査を行う必要があると判断し、本調査を行うことになった。

2 本調査

本調査は、B区のみ平成19年1月5日~平成19年3月29日まで実施した。

調査では、重機による表土剥ぎを行った後、調査区に、国土座標に基づく10m×10mの大グリッドを設定した。このグリッドは包含層の精査、掘削、遺物の取り上げ、図面作成、その後の整理、報告まで活用した。グリッドNo.は、南北に北から1~6、東西に西からB~Eで組み合わせた杭No.を用いた。遺物は、光波トランシットによる点上げと、グリッド及び遺構ごとの一括による取り上げを行った。遺構及び平面図は、光波アリダードで測定し、遺構分布図を作成した。コンタは、50cm間隔で計測した。

調査区の北側では、第IV層が残存していたが、中央部・南側についてはみられなかった。第IV層上での遺構検出では一部硬化面を検出したが、それ以外の遺構については検出できなかった。遺物については、土器片・石斧・石錘等が出土した。

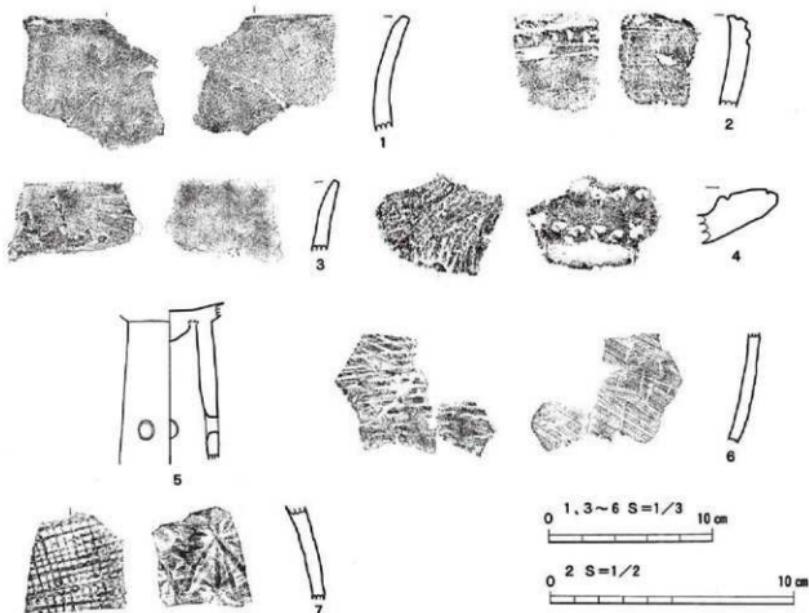
第IV層が残っていない中央部・南側については、第V層上で遺構検出を行い、道状遺構・溝状遺構を3条検出した。また、調査区中央部で配石を伴う集石遺構を1基と溝状遺構の東側と中央部付近で集石遺構を4基検出した。さらに、調査区の西側で、豊穴住居跡を1軒検出した。遺物については、押型文土器片・石錐・石斧・石錘が出土した。

第VI層では、遺構は検出されず、土器片・剥片等が数点出土した。また、第VII層上で礫群を1基検出した。第VII・第VIII層では、遺構・遺物ではなく、第IX層は、残っている部分が調査区の南側に限られていた。

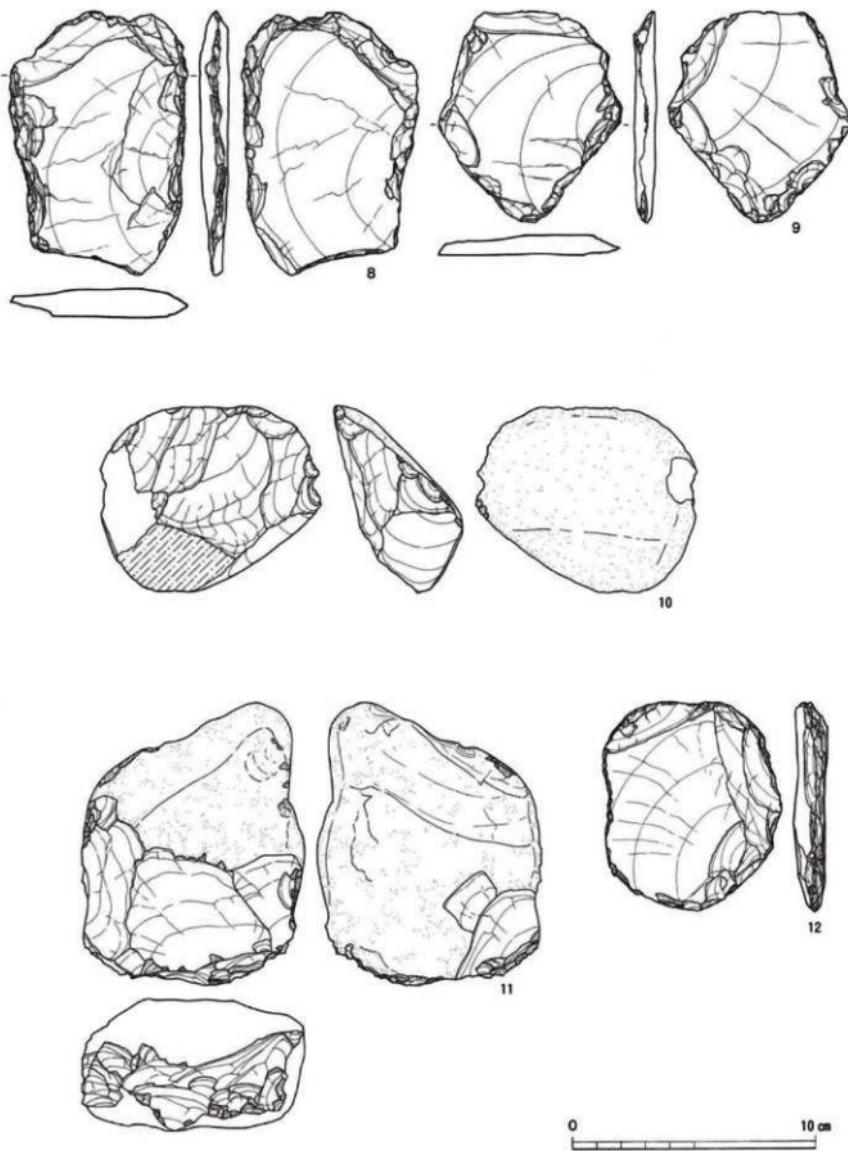
第X層は約1mほどの厚さがあり、ナイフ形石器・石核・剥片が数点出土した。第XI層以下は遺構・遺物とも確認できなかった。



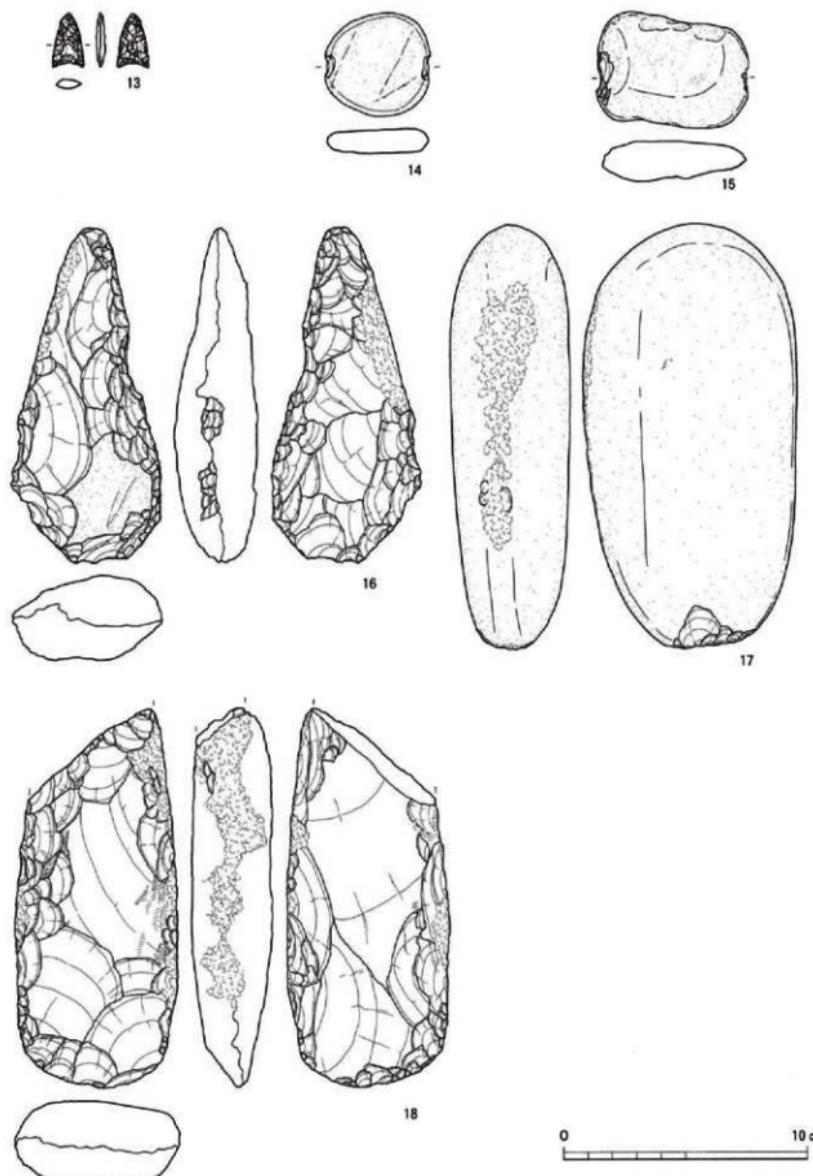
第2図 確認調査トレンチ配置図 (S=1/1,000)



第3図 確認調査出土土器実測図 (S=1/2 · 1/3)



第4図 確認調査出土石器実測図（1）(S=1/2)



第5図 確認調査出土石器実測図（2）(S=1/2)

3 日誌抄

(1) 確認調査

【平成18年11月20日～24日】

重機による表土剥ぎ及びトレントの掘り下げを行った。作業員投入。

A区T①：造構精査、MB 0まで掘削を行う。

B区T①：K-A h上、客土掘削、造構検出を行った。

B区T②：MB 0上で造構検出。礫の混ざった溝状造構を検出する。

B区T③：MB 0上で造構精査。道路状造構ではないかと思われるものを検出。遺物として、石錘・土器片・石斧が出土した。

A区T①：MB 0より掘削、造構検出を行う。土器片が出土した。

【平成18年11月27日～12月1日】

B区T①：表土から2.5mの所でK-A hに到達する。その後ML 1まで掘削する。

B区T①：K-A h上、客土掘削。道状造構と思われる硬化面を検出する。

B区T②：道状造構と思われる硬化面を検出する。窪穴住居跡ではないかと思われる遺物集中出土地点を検出する。

B区T③：道状造構ではないかと思われる硬化面を検出する。

B区T①：K-A hを一部除去する。

B区T②：道状造構と思われる硬化面を確認する。

B区T③：MB 2まで掘削する。

B区T④：ATまで掘削を行う。

B区T②：K-A hで造構検出を行い、道状造構と思われる硬化面を2条検出する。

B区T③：AT下MB 2まで掘削する。

B区T④：MB 3まで掘削する。B区の光波アリダードによる実測を行った。

【平成18年12月4日～6日】

調査トレントを拡張する。重機による表土剥ぎを行った。

B区で土層確認のための深掘りトレントを設定した。

A区：重機で無遺物層除去後の造構検出を行う。

K-A h上から土器片出土（表土から約1.5m下）。

B区T③東側：K r-K bまで掘削する。ML 1下部で剥片が出土する。

A区：トレント掘削。K-A h上で土器片・剥片・石錘が出土する。

B区T⑤：MB 0まで掘削する。道状造構と思われる硬面を検出する。

J Vによる竹林の除去が行われる。

【平成18年12月11日～15日】

A区・B区ともに工事用道路建設のため調査トレントを拡張し、調査を行うこととなった。

A区T①：クロボク掘削。

A区T②：6 m×10mのトレントを設定し、重機による表土剥ぎを行う。

B区T⑥：4 m×20mのトレントを設定し、重機による表土剥ぎを行う。半分ほどで、ML 2～MB 3に達する。遺物については、A区T②のK-A h上で土器片多数・剥片・石錘が出土する。

B区T⑥：K-A h上で造構検出を行い、ピットを検出する。

B区T⑥：K-A h上掘削。ピットを半截し確認したが、樹根であった。溝状造構掘削。遺物は、土器片・剥片・石錘等が出土した。

B区T⑥：K-A hで溝状造構を検出し、埋土掘削の後、溝状造構の実測を行った。遺物として、土器片・石錘・石斧・剥片・黒曜石・石鐵（チャート）が出土した。

【平成18年12月18日～22日】

A区T②：ML 1を掘削し、光波アリダードにより遺物の取り上げを行う。

B区T⑥北側：K-A h掘削。溝状造構全掘削。

B区T⑥南側：K r-K b掘削。MB 1まで掘削する。遺物については、土器片・石錘・剥片が出土する。作業員を13名増員する。

A区T②：ML 1から砾層まで掘削する。土層写

真及び土層断面図を作成した。

A区T③：ML 1掘削。表土から1.7mで疊層に到達した。

B区T⑥北側：一部MB 1まで掘削。完掘写真を撮影する。

B区T⑥南側：MB 1まで掘削し、疊層に到達。

トレンチ全体及び土層写真撮影を行う。

A区T②：トレンチの全体写真を撮り、トレンチの実測を行い、調査を終了する。

A区T③：ML 1の残りの部分を掘削し、調査を終了する。

調査期間を3月まで延長することになり、作業員は、12月中が最後となり、1月から作業再開となる。

(2) 本調査

【平成19年1月9日～1月12日】

調査再開、B区全体を重機による表土剥ぎを行う。また、現場事務所等の設置を行う。

【平成19年1月15日～19日】

作業員作業再開。調査区及び現場事務所周辺の整備を行う。調査区では、壁立てやMB 0での遺構検出を行う。遺構は検出できなかった。駐車場に防護柵を設置する。重機による表土剥ぎで残った客土の部分をK-A h、MB 0まで掘削をする。測量の打ち合わせを業者と行った。調査区中央部東側で、硬化面を検出する。また、ピットを数基検出する。遺物として、土器片・剥片・石錐・石礫が出土地する。測量用の杭打ちが終了する。客土・攪乱を掘削し、K-A h、MB 0、ML 1まで掘り下げた。調査区の北側で硬化面を検出。また、南側で集石遺構を検出する。遺物は、土器片・黒曜石が出土地した。調査区北側及び南側での溝状遺構の検出写真を撮影する。集石遺構（S I 1）の実測を開始する。溝状遺構にトレンチを設定し掘削を行う。

【平成19年1月11日～26日】

溝状遺構のトレンチの掘削を行う。K-A hの残っている部分をMB 0まで掘削する。調査区を光波アリダードで実測をする。溝状遺構のトレンチ掘削。竪穴住居跡と思われる場所のトレンチ掘りを行う。遺物出土地点などを光波アリダードで

実測する。溝状遺構のトレンチ掘削完了。S I 1については、配石があることを確認する。竪穴住居跡と思われる部分については、土の堆積状況から土が堆積したときに遺物が流れ込んできたのではないかと思われる。溝の土層確認ベルトの写真撮影を行う。遺物の点上げをトランシットを使い行った。調査区の東側の搅乱部分を掘削する。溝状遺構の土層確認ベルトのポイントを平板実測をする。重機による排土移動・運搬を行う。溝状遺構（S E 1、2）の土層断面実測・注記を行う。S E 1の実測も合わせて行った。

【平成19年1月29日～2月2日】

S I 1の配石写真、実測を行う。S E 2の土層断面実測・注記を行った後、S E 1のベルトの掘削を行う。S E 1、2の実測も行った。空撮に向けての調査区の清掃を行う。S I 1完掘。S E 1、2を一部掘削し、完掘する。午前中調査区内の清掃を行ったあと、空撮を行った。その後、調査区の南側のMB 0を掘削し、遺構検出を行った。溝の東側の壁際にて、集石遺構（S I 2、3、4）を3基検出する。S E 1、2の床面のレベル実測、S E 3の実測を行う。遺物の点上げを行う。S I 2、3、4の検出写真を撮影する。また、土坑と思われるものも検出する。

【平成19年2月5日～9日】

調査区の南側のMB 0掘削。土坑（S C 1、2）のトレンチ掘り、検出写真、土層断面写真撮影を行う。溝周辺のMB 0掘削。硬化面にトレンチを設定し、トレンチ掘りを行う。調査区南側で石礫が2点出土した。S I 4の実測を開始する。また、調査区南側の礫の範囲を実測する。調査区南側及び西側のMB 0掘削。S I 2実測開始。調査区南側の礫の範囲写真撮影及び実測を行い、遺物の点上げを行った。また、S C 1、2の土層断面実測も行った。調査区南側及び西側のMB 0、ML 1掘削。S I 3、4の実測を行う。ML 1でコンタ図の作成を行った。硬化面断面の写真撮影を行った。調査区南側及び北側のML 1掘削。S I 4完掘。硬化面の断面の実測を行い、ベルトの掘削をする。調査区の北側でS C 3を検出、西側で竪穴住居跡S A 1を

検出する。

硬化面全体の写真撮影を行う。調査区西側の堅穴住跡にトレントを設定し、先行トレント掘りを行う。土層断面の確認も行った。SC 2 完掘、実測終了。SI 2、3、4 完掘、実測終了。

【平成19年2月13日～16日】

調査区の南側の礫をグリッドごとに取り上げを行なった。SA 1 の掘削を開始する。SC 3 完掘、実測終了。硬化面の実測を行う。調査区の北側の硬化面を実測する。西側、南側、中央部にて、ピット (ML 1) 検出。半截し並ぶかどうかの確認を行った。SA 1 の掘削中炭化材を検出する。

【平成19年2月19日～23日】

調査区南側の壁際でトレント掘りを行い、MB 1 まで掘削する。また、北側の壁際も同様に MB 1 まで掘削を行なう。硬化面の掘削も行なった。重機による排土移動を行う。ピットの実測及びセクションポイントの実測を行う。硬化面の MB 0 の残り部分の掘削。調査区北側及び南側 ML 1 掘削。SI 5 検出、実測を開始する。調査区南側 Kr - Kb 上で礫群を検出し、実測を開始する。また、SA 1 のベルトを掘削し、実測を開始する。ピットの検証を行い、実測し、完掘する。調査区南側の礫群の実測を行う。SA 1 の遺物出土状況写真の撮影も行った。ピットのレベル実測。SI 5、6 の実測。遺物の取り上げも合わせて行った。

【平成19年2月26日～3月9日】

調査区北東部の ML 1 を掘削し、散礫を検出する。調査区中央部及び北東部の ML 1 を掘削する。SI 6 の実測を終了した。また、散礫の実測も行った。SA 1 の実測が終了し、完掘した。調査区南側の Kr - Kb を掘削する。調査区の西側で環状ピット群と思われるピットについて半截を行った。調査区南側を MB 1 まで一部掘削。調査区中央部東側の数本の溝状の掘り込みの掘削を行う。SA 1 の完掘写真撮影。調査区中央部 ML 1、南側 Kr - Kb の掘削を行う。重機による排土移動及び調査区の一部掘削を行う。同時に礫洗いを行い、石材別の仕分け・計量作業を行った。調査区北側、南側をブラックバンド (MB 2) まで掘削を行っ

た。調査区中央部を Kr - Kb からブラックバンド (MB 2) まで掘削を行う。調査区東側の数本の性格不明な溝状遺構の実測及び写真撮影を行う。調査区中央部の MB 2 を掘削する。石核・剥片が出土する。

【平成19年3月12日～16日】

調査区中央部の MB 2 を掘削し、土層確認用トレントの掘削も合わせて行った。石核と剥片が出土した。調査区東側の性格不明な溝状遺構の掘削を、土層トレント、深掘りトレントの実測を行った。調査区中央部の MB 2、東側の Kr - Kb から MB 2 まで掘削を行う。調査区中央部の MB 2 から MB 3 まで、東側は MB 2 まで掘削を行う。石核と剥片が出土した。掘り下げる部分の実測も行った。

【平成19年3月19日～20日】

調査区中央部は ML 3 まで、東側は MB 3 まで掘削を行う。発掘器材等の片づけ・整理を行う。

【平成19年3月26日】

発掘器材の片付け・整理を行い、発掘器材を撤収する。作業員最終日。

【平成19年3月29日】

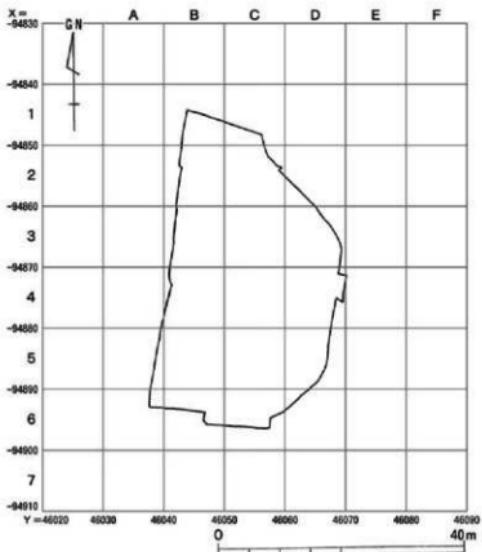
現場事務所の撤収。調査終了。

第2節 整理作業及び報告書作成

平成19年6月から埋蔵文化財センター本館において整理作業を開始した。水洗い・注記・計測・土器及び石器の接合を行った。土器と石器をピックアップして、土器についてはセンターで実測し、石器については、実測委託をした。本遺跡では、堅穴住跡から炭化材が検出されたので、年代測定と樹種同定の自然科学分析を委託した。また、石器実測委託と並行して、堅穴住跡や集石遺構の図化及び遺構・遺物分布図などを作成、平成20年3月に報告書の原稿を完了させた。印刷・製本は平成20年度に行なった。



第6図 周辺地形図 ($S=1/4,000$)



第7図 調査区グリッド図 ($S=1/800$)

第IV章 調査の記録

第1節 基本層序

基本層序は、調査区B区の北側に設定したトレチを、またA区の南側に設定したトレチを参考にした。層序は、調査区内で一定ではなく、北側では良好に堆積しているが、南に行くに従って確認できない層も見られた。南中原第1遺跡(二次)における基本層序を次のとおり示す。

第I層 表土及び耕作土

第II層 客土

造成土。A区・B区とともに、傾斜地を埋めるために盛られたと思われる土で、厚い所で1mに達する。多くの土器片・石器等の遺物を包含する。

第III層 黒色土 (Hue7.5YR3/1)

クロボク層。第V層に非常に似ているが第V層より明るめの黒色である。粘性はない。A区では、良好に見られたが、B区ではまばらに見られた。

第IV層 明黄褐色土 (K-A h) (Hue10YR3/1)

二次堆積。しまりはなくさらさらしている。黒褐色土が混じり込んでいる。A区及びB区の北側では良好に残存していたが、南に行くに従って、確認できなくなった。

第V層 黑褐色土 (MB 0) (Hue7.5YR2/1)

第III層に非常によく似ているが、第III層よりも黒く、弱い粘性をもち、硬くしまっている。A区・B区とも全体に良好に堆積していた。

第VI層 褐色土 (ML 1) (Hue10YR4/6)

しまりがあり、弱い粘性がある。B区では、小砂利を中間に含む層と、第VI層下層に1cm程度のオレンジ色の礫を多量に含む小砂利層が見られた。

第VII層 Kr-Kbを含むにぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4)

固いシミが見られ、中に黄色の粒を含んでいる。A区ではまばらにしか確認できなかったが、B区では調査区の中央部から南側にかけて良好に堆積していた。

第VIII層 褐色土 (MB 1) (Hue10YR4/4)
弱い粘性をもつ、A区では、一部堆積していたが、B区では確認できなかった。

第IX層 暗褐色土 (ML 2) (Hue10YR4/4)

粒子は細かいが、しまりはない。A区・B区ともAT混じりのブロックが多量に含む。

第X層 明黄褐色土 (AT) (Hue10YR6/6)

流水の影響と思われる丸いシミを多く含む。A区では、第IX層に混じり込んで見られただけであったがB区では調査区の南側で確認できた。北側は流水の影響で流れてしまったと思われ、確認できなかった。

第XI層 暗褐色土 (MB 2) (Hue10YR3/3)

白いバニスがあり、固くしまっており、クラックが入りやすい。A区・B区ともに良好に堆積していた。B区の中央部で石核・剥片が出土している。

第XII層 暗褐色土 (MB 3) (Hue10YR3/4)

第XI層より黒い色をしている。1cm程のオコシ粒が少量混じっている。固くしまっており、クラックが入りやすい。

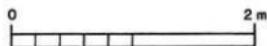
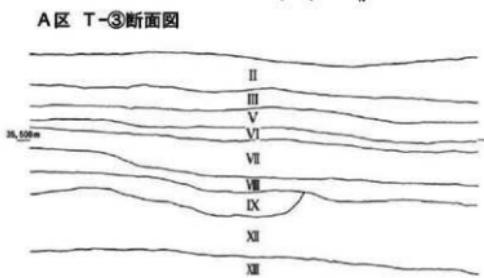
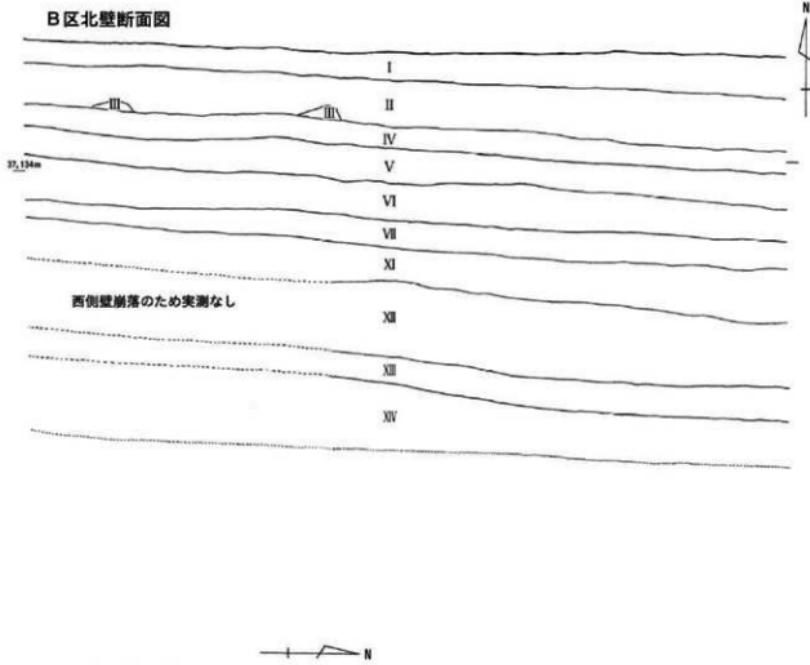
第XIII層 明黄褐色土 (ML 3) (Hue10YR6/6)

1cm程のオコシ粒が多量に混じり込んでいる。しまりはないが、粘性をもっている。

第XIV層 磕層

第1表 基本層序対照表

層	南中原第1遺跡土層	東九州基本土層
I	表土および耕作土	表土
II	客土	黒色土 高麗スコリア
III	黒色土	黒色土
IV	明黄褐色土(K-A h)	鬼界アカホヤ(K-A h)
V	黒褐色土	黒褐色ローム(MB 0)
VI	褐色土	暗褐色ローム(ML 1) 桜島黒摩(S Z-S)
VII	K r-K bを含むにぶい黄褐色土	褐色ローム 小林駒石ローム (K r-K b)
VIII	褐色土	暗褐色ローム(MB 1)
IX	暗褐色土	暗褐色ローム(ML 2)
X	明黄褐色土(AT)	始良T n(AT)
XI	暗褐色土	暗褐色ローム(MB 2) 始良深港(A-F m)
XII	暗褐色土	始良大塙(A-O t)
XIII	明黄褐色土	暗褐色ローム(MB 3)
XIV	礫層	褐色ローム(ML 3) 赤褐色ローム
XV		鹿島アワコシ(K r-A w) 明褐色ローム(ML 4)
XVI		鹿島イワコシ(K r-I w)



第8図 A区T-③西侧・B区北壁土層断面図 (S=1/40)

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

本遺跡では、B区のみ旧石器時代の調査を行った。旧石器時代の調査は、縄文時代早期の調査を終了した調査区の中央部、調査区の東側を中心に第X層まで下げるながら実施した。調査区中央部南壁側で第VII層より礫群を1基検出した。遺物としては、調査区中央部の第XI層より、ナイフ形石器・石核・剥片が出土した。

遺構

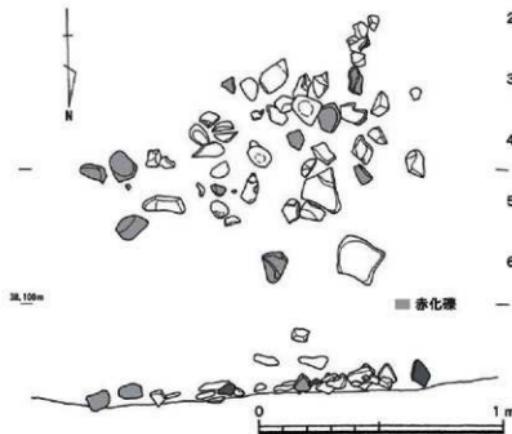
礫群（第9図）

調査区の南壁のKr-Kb上（第VII層）で1m×1mの範囲で礫が検出された。礫は砂岩を中心に、ホルンフェルス・尾鈴山酸性岩類が混ざっている。明確な掘り込みは無く、埋土に少量の炭化物が混ざっている。赤化した礫の割合は、全59個の構成礫の内、10個程度で全体の17%になる。構成礫の石材は、砂岩が51%、ホルンフェルスが29%、尾鈴山酸性岩類が20%になる。

遺物

ナイフ形石器（第11図19～21）

3点出土し、すべて図化した。利用石材は、19が黒曜石製で腰岳産、20・21はホルンフェルス製である。完形は2点であるが、1点は半折れしている。



第9図 磫群実測図 (S=1/20)

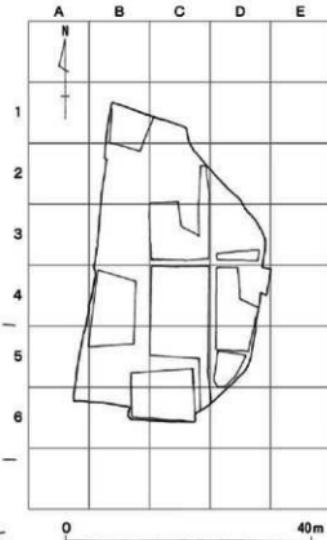
19は先端部のみ出土しており、刃部が刃こぼれしている。20は、先端が僅かに欠損しているが、刃部に使用痕と思われる欠損部分がある。21は一側縁加工で背部の加工は見られない。

石核（第11図23～26）

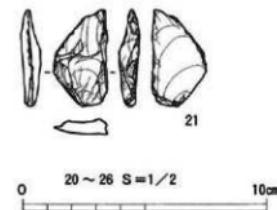
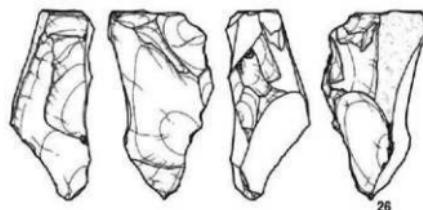
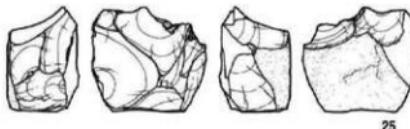
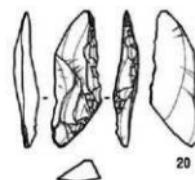
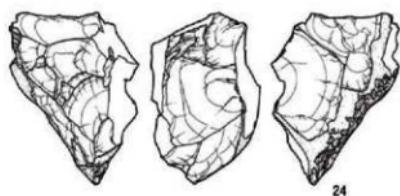
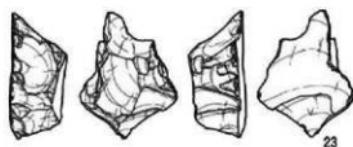
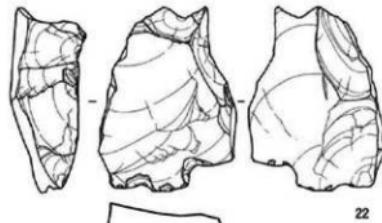
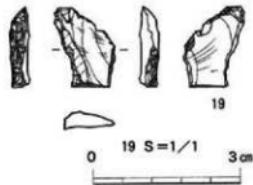
4点出土し、全て図化した。利用石材は、すべてホルンフェルス製である。23は、上面を打面とし剥離させ、その後左右侧面を打面として剥離させている。24・25は、原石から上面の単剥離面に打面を設定したあと、上面を打面とし回転させながら剥離している。26は、やや風化しているが、最初に左側を打面として剥離させ、次に剥離させた上面を打面として剥離させている。

剥片（第11図22）

石材は、ホルンフェルス製である。風化が激しく使用痕は見受けられない。自然面と思われる部分にも打面が見られるが、調整打面である。上面を打面として剥離させ、その後、右側面を打面として剥離させている。



第10図 旧石器時代調査トレンチ配置図 (S=1/800)



第11図 旧石器時代石器実測図 (S=1/1・1/2)

第3節 繩文時代の遺構と遺物

遺構

客土（第II層）が厚く、調査区北部のみしかK-A h（第IV層）が確認できないため、繩文時代の遺構・遺物はMB 0（第V層）上面を中心に検出を行った。その結果、遺構は散礫がMB 0で1箇所、ML 1（第VI層）で6箇所、集石遺構5基、土坑3基、道状遺構2条、環状ピット群1基を検出した。散礫は主に調査区の南側での検出、集石遺構は、調査区中央部で2基、調査区東側から3基検出した。土坑は3基とも調査区中央部からの検出であるが、時期を特定する遺物がなく、検出層のMB 0層と周辺に繩文時代後・晚期の土器の出土が多いことから、繩文時代後期以降のものであると思われる。また、道状遺構については、調査区の西側・東側でそれぞれ検出したが、東側の分については、K-A hの残存部分からの検出であった。

1 散礫

MB 0（第V層）を掘削中に南側で多くの礫を検出した。さらに、第V層を掘削したあとML 1（第VI層）に達したところでさらに礫を検出した。ML 1では、南側で2層にわかれて礫が検出された。また、北側でもML 1上で礫が検出された。時期としては、MB 0での散礫は、周辺の出土遺物が後・晚期の土器であることから、後・晚期のものであると言えるが、ML 1上の散礫は、層位的には早期にあたるが、周辺の出土遺物の中には後・晚期の土器も含まれている。ただ、南側については、水流の影響を受けているところも見られ、斜面地でもあることから、土器については流れ込みの可能性がある。また、打製石器等も出土していることから、ML 1上の散礫については、早期に位置づけた。石材については、砂岩・尾鈴山酸性岩類・ホルンフェルスが混ざっており、特に砂岩が中心である。

2 集石遺構（第13～15図）

5基検出したが、2基については、調査区の中央部、残りの3基については、調査区の東側であり、特に分布による傾向は見られなかった。5基中4基は、溝状遺構（SE 1・SE 2）に切られており、

全容ははっきりと分からぬ。多くの礫で構成されるものと、少ないものとの差も見られ、全体的に赤化礫の割合も少ない。5基中4基は掘り込みが見られる。

S I 1（第13図）

S I 1は、多くの礫で構成され、5基検出された中で一番大きなもので、1.6m×1.4mである。構成される礫は525個（配石も含む）で、石材は尾鈴山酸性岩類（24%）・砂岩（22%）・ホルンフェルスが混ざる。特にホルンフェルスが多く、全体の53%を占める。掘り込みが深く、尾鈴山酸性岩類を中心とする配石が見られた。赤化礫は1割程度である。炭化物が出土しており、自然科学分析による放射性炭素年代測定を行ったところ、 $9,460 \pm 30$ 年BP（8,830BC）という結果が得られた。MB 0（第V層）からML 1（第VI層）での検出であったことも踏まえて、早期のものであると判断した。

S I 2（第14図）

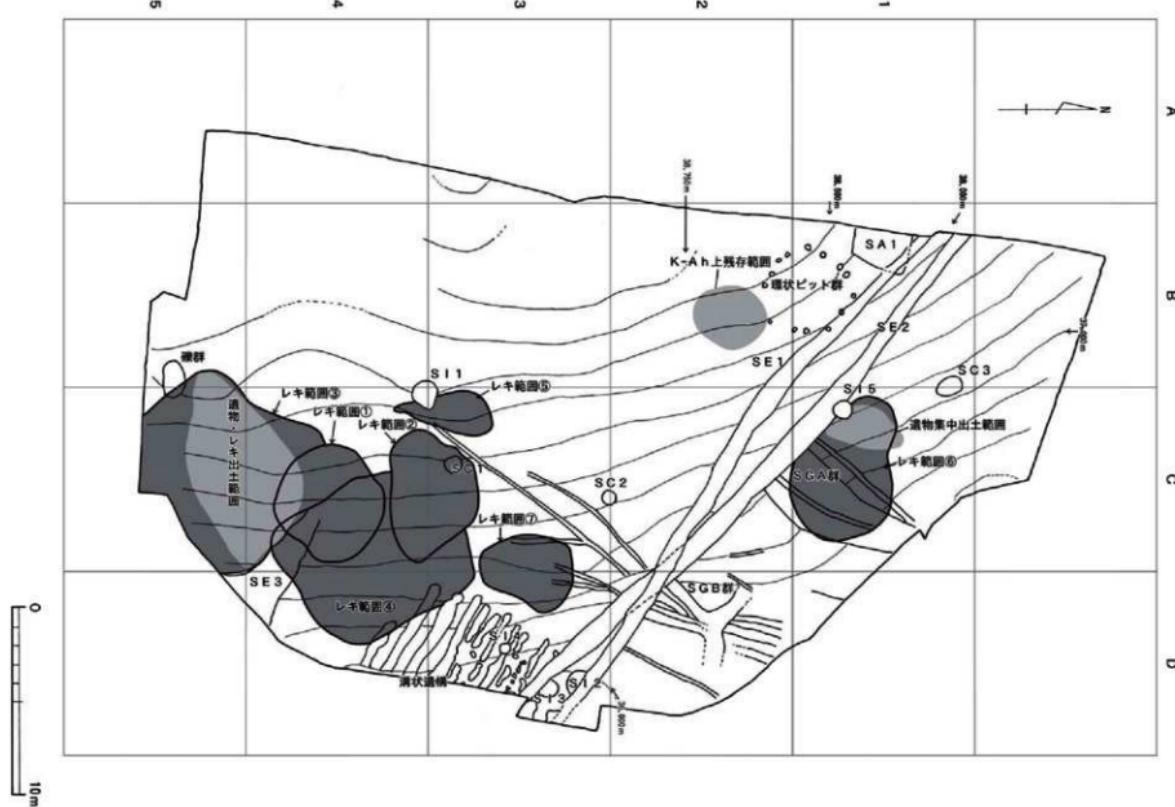
S I 2は、半分近くを溝状遺構（SE 1）に切られており、全体の状況はわからない。礫の石材は、尾鈴山酸性岩類が22%、ホルンフェルスが7%で、S I 1に比べると砂岩が多く、全体の71%を占める。疎で赤化礫は少ない。破碎礫と見られるものも少ない。掘り込みは少し浅めで、全体的になだらかである。時期としては、S I 2の北側に並ぶようにS I 3があるが、S I 3が早期の集石遺構であることから同様に配置等の関係から、早期のものと判断した。

S I 3（第14図）

S I 3は、南から西にかけて溝状遺構（SE 2）に切られているが、比較的残りが良い。中央から南にかけてしっかりと掘り込みがある。礫は中心から南にかけては密で、北にかけては疎になっていく。赤化礫は中央部にやや多く見られる。破碎礫と思われるものも多く、繰り返し使用したと考えられる。礫構成は、359個のうち、砂岩が60%を占め、尾鈴山酸性岩類が29%、ホルンフェルスが11%である。床面より炭化物が出土しており、放射性炭素年代測定を行ったところ、 $9,295 \pm 30$ 年BP（8,640BC）という結果が得られた。時期としては、早期と判断できる。

第12図 遺構分布図 (S=1/300)

- 18 -



S I 4 (第14図)

S I 4は、東側から西側に伸びる複数の性格不明な溝状遺構に切られており、全体は分からぬ。疊の数は他の集石遺構と比べると少なく、81個である。掘り込みはあるが、配石は見られなかつた。疊構成は、尾鈴山酸性岩類が47%、砂岩が44%、ホルンフェルスが8%である。S I 4もS I 2・3と並ぶような配置になつておつり、早期のものと判断した。

S I 5 (第15図)

S I 5については、もっとも疊の少ないもので、掘り込みの無いものである。ただ、溝状遺構 (S E 2)に切られて僅かに残っているものであると考えられる。疊構成は、砂岩が59個のうち67%を占めている。時期を特定できる遺物の出土はないが、M L 1 (第VI層)上の検出であることから、早期のものと判断した。

3 土坑 (第16図)

土坑は、3基ともすべて調査区の中央部での検出であった。最大1m程度の大きさのものである。S C 1・S C 2は、70cmほどの大きさのもので、深さは35cm~45cmである。M B 0 (第V層)での検出であった。また、S C 3は、M L 1 (第VI層)での検出であった。1mほどの大きさがあるが、深さは、15cmほどしかない。K-A h (第IV層)が残存したところであるが、K-A hで、トレンチャ痕等と思われるものもあり、削平を受けていることも考えれば、検出面はもう少し上の層ではないかと思われる。

時期については、遺物の出土がないため、明確な特定はできないが、周辺の出土遺物が後・晚期の遺物であることから、後・晚期のものではないかと判断した。

4 道状遺構 (第17図)

調査区の北側壁側から南に伸びる硬化面を西側と東側で検出した。中央を溝状遺構 (S E 1・2)で切られてはいるが、調査区を横断するような様相を示しており、人の生活の跡も伺える。また、遺跡の南に一次調査区、北に野首第2遺跡が位置していることから、遺跡間の往来があつた可能性もある

遺構名	総量 (kg)	砂岩 (kg)	尾鈴山 酸性岩類 (kg)	ホルン フェルス (kg)	配石 (kg)
S I 1	31.0	9.5	22.5	23.0	24.0 尾鈴・ホルン
S I 2	23.0	13.5	8.5	1.0	—
S I 3	55.5	25.5	2.6	4.0	—
S I 4	14.5	4.5	8.5	1.0	—
S I 5	8.5	4.5	2.5	1.5	—
散疊 1	17.0	11.5	3.0	2.0	—
散疊 2	67.0	29.5	28.5	8.5	—
散疊 3	31.0	6.0	14.0	11.0	—
散疊 4	30.5	23.0	5.5	2.0	—
散疊 5	40.0	24.0	8.5	7.5	—
散疊 6	64.0	28.5	7.5	28.0	—
散疊 7	45.0	18.5	14.5	12.0	—

第2表 集石遺構・散疊観察表

が、一次調査区との関連は確認できなかつた。時期としては、第IV層～第V層 (M B 0)での検出、出土遺物が磨製石斧、後・晚期の土器であることから、後・晚期以降のものであると判断した。

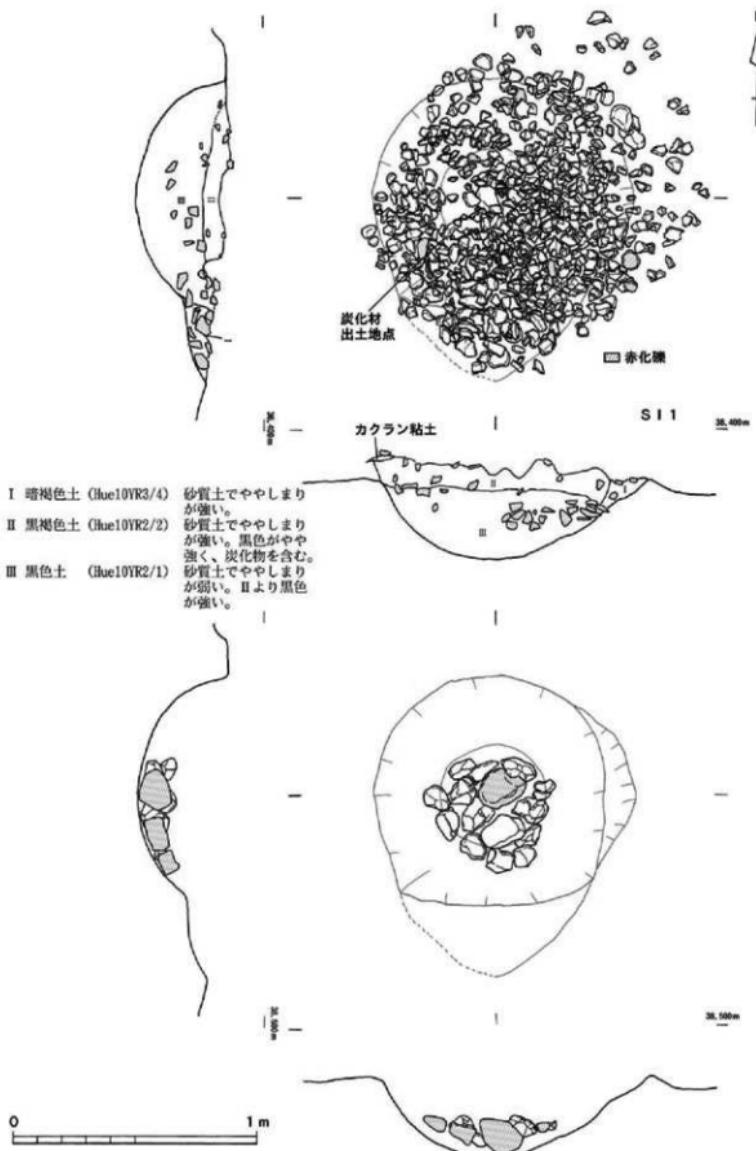
5 環状ピット群 (第18図)

調査区の西側で、径5mの円形に並ぶピット群を検出した。一部が溝状遺構 (S E 1)で切られている。M L 1 (第VI層)での検出であるが、調査区自体が削平を受けており、K-A h (第IV層)が僅かに残る部分であり、本来は、もう少し上の層から掘り込んでいる可能性がある。西側と東側とでは、ピットの床面のレベルが異なつておつり、建物と何らかの関連があると思われ、ここに何らかの建物があった可能性がある。時期としては、遺物が出土しておらず、明確に特定はできないが、周辺が後・晚期の遺物が多いことから、後・晚期のものと判断した。

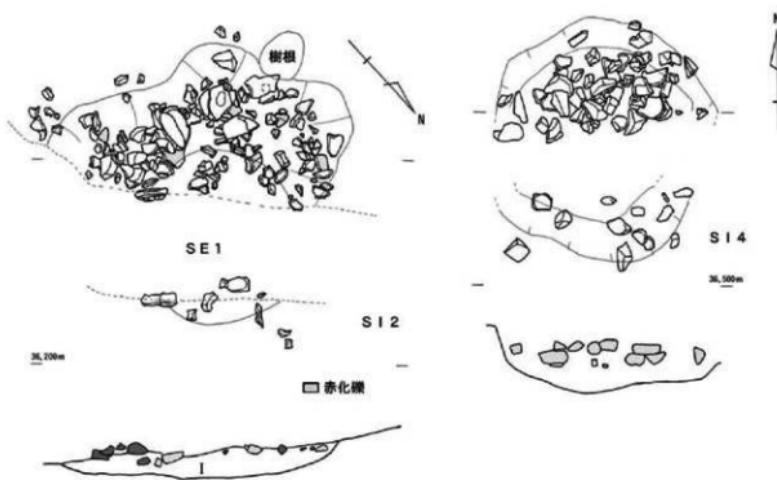
6 包含層出土遺物

遺物が出土した層は、主に第III層から第VI層で、早期に該当するが、実際に出土した土器については、後・晚期のものが多く、早期のものは少ない。斜面地であることから、第V層から第VI層での後・晚期の土器は流れ込みと考えられる。

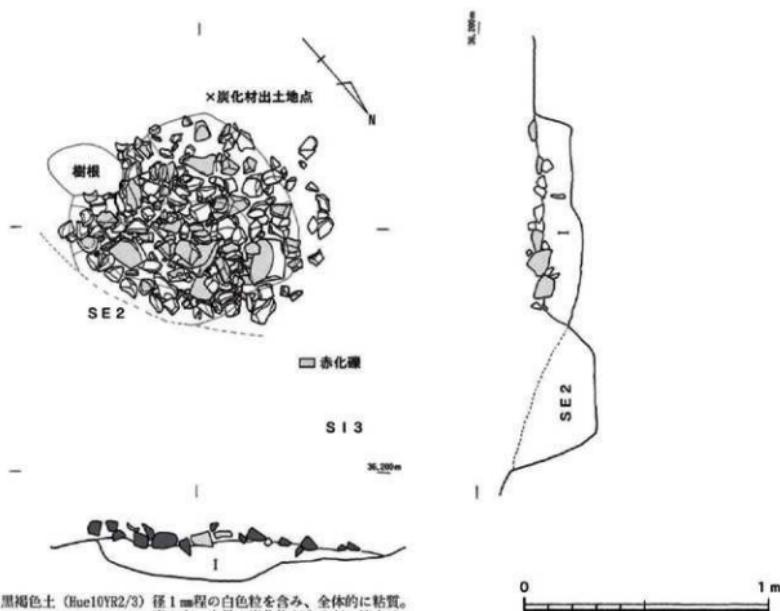
石器については、時期の特定はできないが、土器との関係を考えると主に後・晚期のものであると言える。ここでは、実測した繩文土器34点・石器67点を掲載する。なお、実測図中の土器の傾きについては、小片や洞部片などで不明確なものがある。



第13図 集石遺構実測図 (1) (S=1/20)

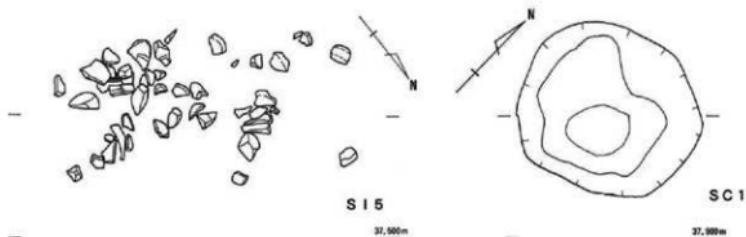


I 黒褐色土 (Hue7, 5YR2/2) 径 1 mm 程の白色粒、2 mm の橙色粒を含む。



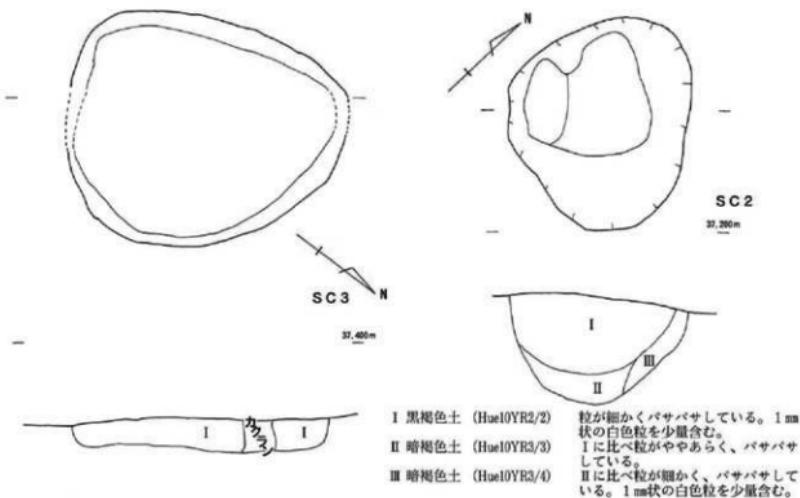
I 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 径 1 mm 程の白色粒を含み、全体的に粘質。底の方に少量の炭化物が入るが、焼土は見られない。

第14図 集石遺構実測図 (2) (S=1/20)



第15図 集石遺構実測図（3）(S=1/20)

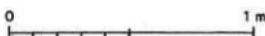
- I 黒褐色土 (Huel0YR3/2) 粒が細かく、固くしまっている。
1 mm程度の白色粒を少量含む。
- II 暗褐色土 (Huel0YR3/4) 粒は細かくバサバサしている。
2 mm程度の褐色の粒を少量含む。
- III 明黄褐色土 (Huel0YR6/6) 粒は細かくバサバサしていてM
L1と思われる。

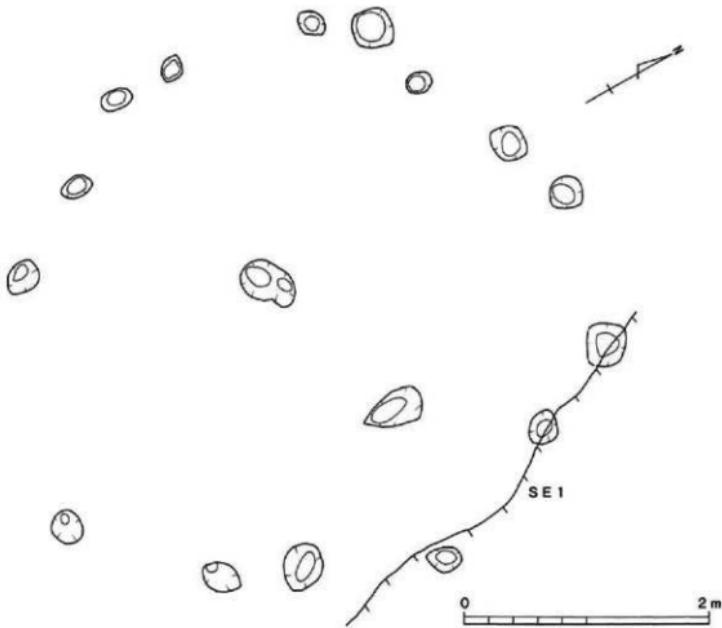


- I 黒褐色土 (Huel0YR3/2) 粒は細かく、1 mm状の白色粒を
少量含む。

- I 黒褐色土 (Huel0YR2/2) 粒が細かくバサバサしている。1 mm
状の白色粒を少量含む。
- II 暗褐色土 (Huel0YR3/3) Iに比べ粒がややあらく、バサバサ
している。
- III 暗褐色土 (Huel0YR3/4) IIに比べ粒が細かく、バサバサして
いる。1 mm状の白色粒を少量含む。

第16図 土坑実測図 (S=1/20)





第17図 環状ピット群実測図 (1/40)

土器 (第21~23図27~60)

27は、深鉢の口縁部で内外面とも横方向のナデが施されている。外面には、楕円形押型文が施されており、早期の土器である。

28・35は、深鉢の口縁部で内面には横方向のナデが施されている。外面には、沈線を有する。35については、口縁部の上部に2条の沈線が施されている。

30・34は、深鉢の口縁部で外面に孔列文が施されている。内面については、ナデが施されているが、30は押圧の跡が残っている。また34は、外面に条痕も施されている。孔列については、外面から内面に向けて貫通してはおらず、内面がふくらんでいる。

32・45・47は、深鉢の口縁部で外面は、32・47は口縁上部に突帶が、45は内面に貼り付け突帶が施さ

れている。

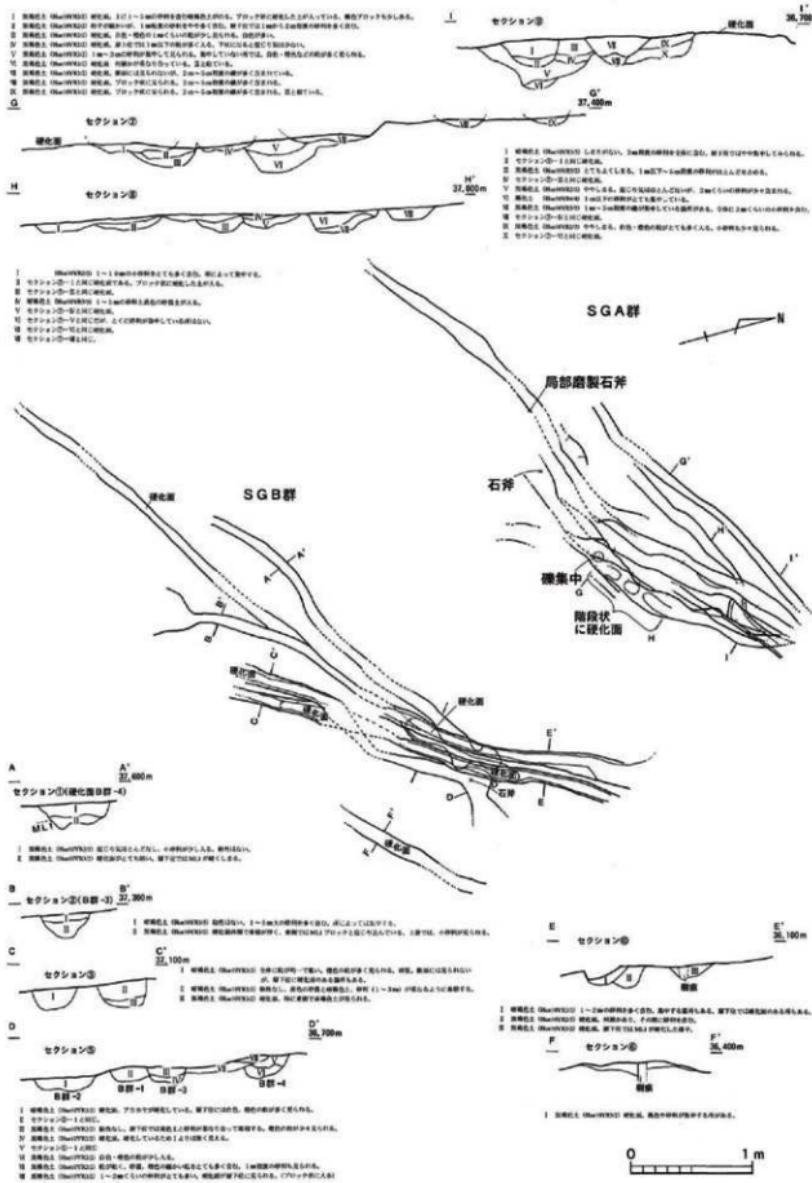
33・36~38・42・49・51・55は深鉢の口縁部で、33・38・49については、外面に条痕が、42・51・55は内外面とも条痕が施されている。36は、内面に条痕、外面に刺突文が施されている。

37については、内面に横方向の条痕が、外面に工具による沈線文が施されている。

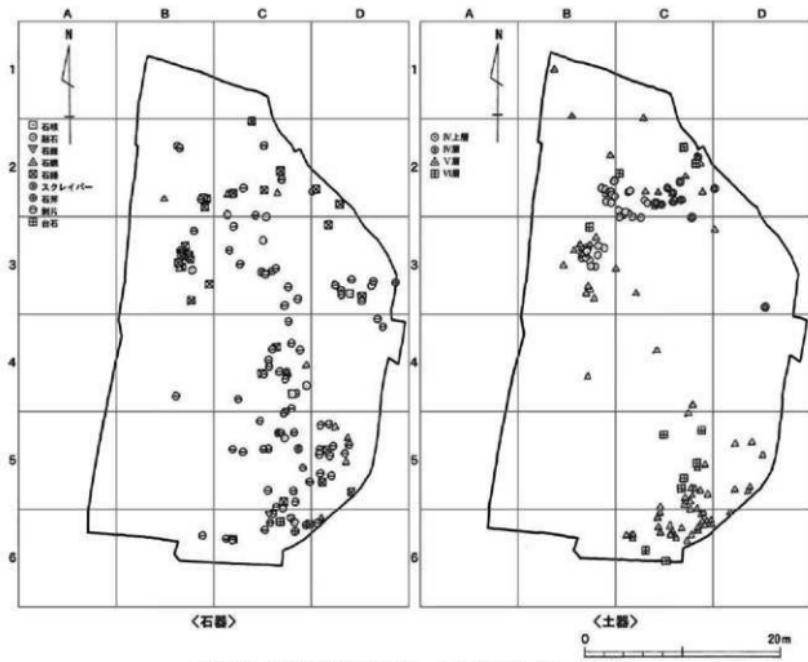
43・46・52は、深鉢の口縁部で内外面ともナデが施されているが、52は、外面にススが付着している。

44・50は、口縁部が波状を呈する。44は外面とも横方向のナデが施されており、内面には押圧の跡が残る。50は、外面に条痕文を有し、ススが付着している。

48は、深鉢の口縁部で内面は横方向のナデが施さ



第18図 道状遺構A群・B群実測図 (S=1/160)・断面図 (S=1/40)



第19図 繩文時代出土石器・土器分布図 (S=1/500)

れている。外面には口縁上部に刺突文、中央部に刻目突帯文が施されている。外面に押圧の跡も見られる。

39・53・58は深鉢の頸部である。39は、内外ともに磨きが施されている黒色磨研土器である。53は、外面に沈線文を有する。58は、内外面に磨きが施されており、外面には把手があり、把手上に刺突文が、上部に沈線が一条と繩文が施されている。

40は、深鉢の口縁から脣部にかけてのもので、内外面にナデが施されている。やや、口縁上部にいくにしたがって外反している。

29は浅鉢の胸部で、内外面とも丁寧な磨きが施されている。外面に穿孔が1箇所ある。

31・41・51・54は深鉢の胸部で、内外面とも条痕が施されている。41は内面に右下がりの条痕、54は外面に右下がりの条痕が、54は条痕後のナデが、内面もしくは外面に施されている。

56・57は深鉢の底部で、56は内外面とも押圧の跡が見られ、外面にススが付着している。57は、内外面ともにナデが施されている。外面に押圧の跡が見られる。

59・60は深鉢の胴部であるが、断片が丸く削られている二次加工の土器片で円盤形土製品の可能性がある。用途は不明だが、内外面にナデが施されている。特に59は、外面に上面を打ち欠いたような跡がある。59・60とともに外面にスヌが付着している。

石錐（第24図61）

石錐は1点出土した。利用石材はチャートである。原石の上部から剥離させた後、両側を打ち欠いて基部を尖らせている。逆三角形を呈する。

打製石鏃（第24図62～75）

打製石器は、14点出土し、全て図化した。利用石材は、黒曜石が6点、ホルンフェルスが5点、チャートが3点である。62~64・69・74はホルンフェル

ス製で、平面形は二等辺三角形で基部は内湾している。74は、製作途中のものではないかと考えられる。65・66・72はチャート製で、65・66は平面形二等辺三角形で基部が内湾している。72は僅かに基部が内湾している。67・68・70・71・73・75は黒曜石製で、67・68・71・73は姫島産である。平面形は二等辺三角形で基部は内湾している。4点とも先端部・基部とも欠損している。73は、最大長が1.5cmで出土した石鏃の中で最小のものである。70・75は桑ノ木津留産で、平面形は二等辺三角形で75は僅かに内湾している。70については先端部及び基部が欠損しているが、基部は内湾している。

礫器（第24図76）

利用石材は砂岩で、左側面及び基部に剥離が見られる。表面及び右側面に自然面が残る。

石核（第25図77～82）

石核は8点出土し、そのうち6点を図化した。利用石材は、すべてホルンフェルスである。すべて自然面が残っており、先端部・基部・側辺方面から剥片を削出したと思われる。77・78・80・81については、やや風化が見られる。

二次加工剥片（第25～26図83～88）

二次加工剥片は6点出土し、すべて図化した。利用石材は、すべてホルンフェルスである。83・85～88については、形状・大きさ・幅等から石斧製作のために加工されたものと思われる。84・86については、一部自然面が残る。

円盤状石器（第26図89）

円盤状石器は1点出土した。利用石材は、ホルンフェルスである。裏面に自然面を残し、上部・基部・側辺を打ち欠いて円盤状に加工している。用途は不明だが、剥片を削出した残りの部分で製作した可能性もある。

スクレイパー（第27図90～98）

スクレイパーは9点出土し、すべて図化した。利用石材は、ホルンフェルスが7点、砂岩が1点、石英が1点である。90が石英製、95が砂岩製である。93を除けば、刃部が右ないし左側になる。92・94・98は剥片を利用したものと思われる。

打製石斧（第28図100・102・104）

打製石斧は、27点出土したが、そのほとんどが欠損品であった。そのため、完形品と特徴的なものだけ、3点を図化した。利用石材はすべてホルンフェルスである。3点とも形状は二等辺三角形に近いもので、石斧の下位に最大幅をもつ。104は、最大長が20cmの大型で完形品である。102は、最大厚が1.4cmで、剥片を利用したものと思われる。

磨製石斧（第28図99・101・103）

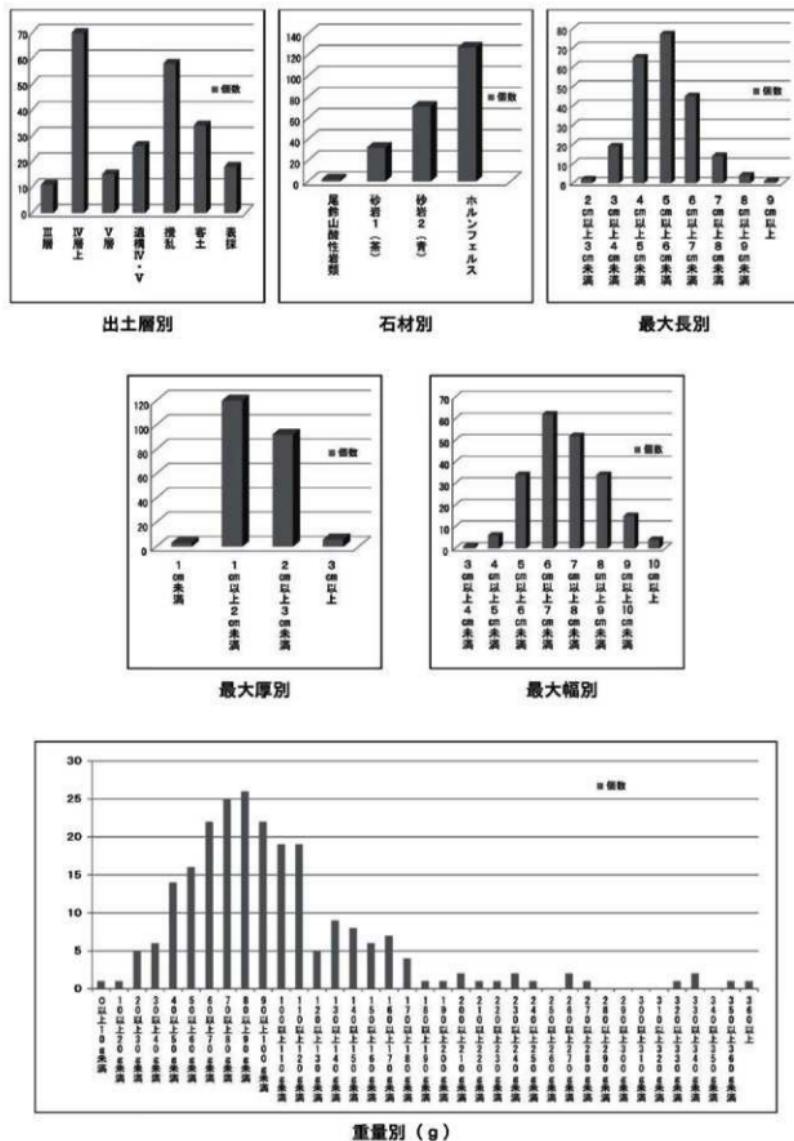
磨製石斧は5点出土し、そのうち特徴的なものを3点図化した。3点とも形状は、長方形に近いもので、刃部は直刃、断面形は扁平である。石材は、ホルンフェルスである。101・103は、刃部の部分が磨かれており、局部磨製石斧と思われる。99は、最大厚が1.5cmと薄く、剥片を利用したものと思われる。左側面及び刃部に磨きが見られる。3点とも上部が欠損している。

蔽石（第19図105～109）

出土した25点のうち、特徴的なものを5点図化した。利用石材は、砂岩が10点、尾鈴山酸性岩類が15点である。105・106は、石材が尾鈴山酸性岩類で側面に敲打痕が一周巡っている。107は上下部及び右側面に、108は表面・右側面・裏面に、109は、上下部にそれぞれ敲打痕が見られる。107～109は砂岩製である。

石錘（第29～30図110～127）

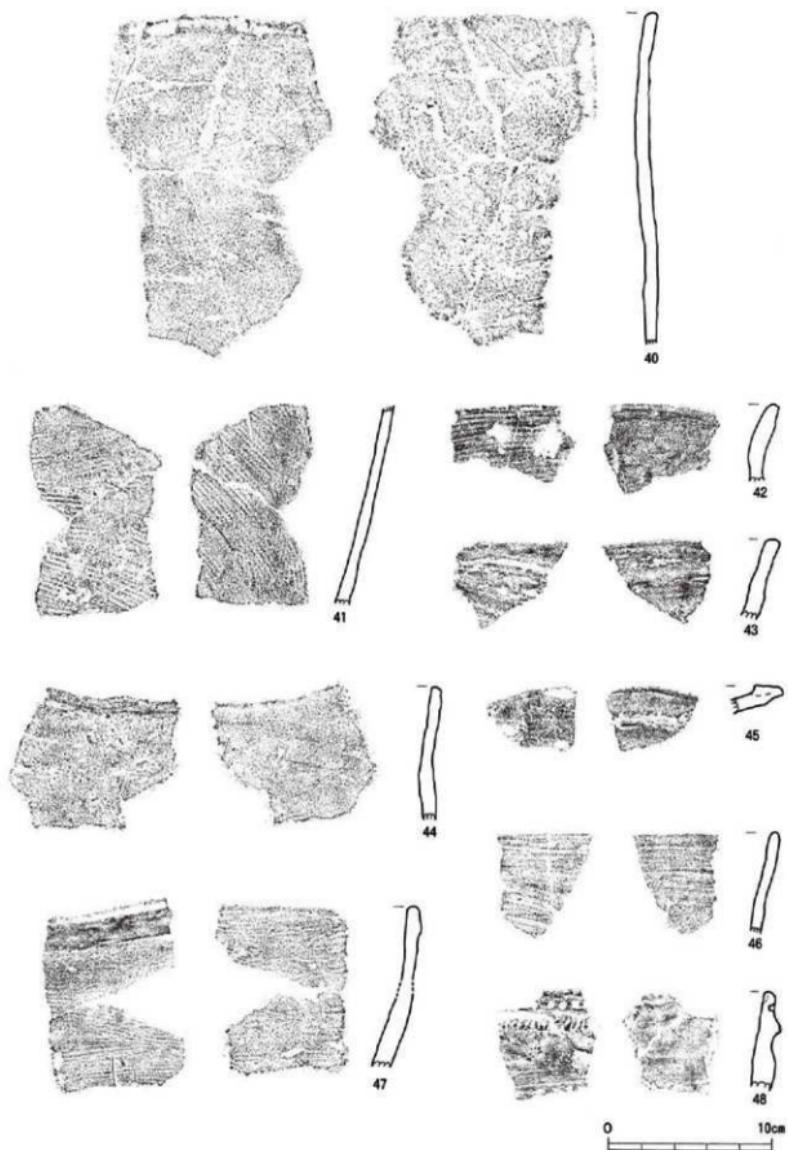
石錘は、A区・表様・客土・攢乱出土分を含めて、232点出土している。そのうち特徴的なものだけ20点図化した。全て、長軸の両端を打欠いたもので、利用石材はホルンフェルスが127点、砂岩が103点、尾鈴山酸性岩類が2点である。重量は約6g～370gの範囲のものであるが、50g～150g以下のものが大半を占める。また、最大長・最大幅・最大厚の傾向としては、最大長が4cm～6cm、最大幅が6cm～8cm、最大厚が1cm～3cmのものがほとんどである。出土層としては、第IV層までの出土が大半を占めるが、15点ほど第V層からの出土もある。石錘の使用時期を考慮すると、第V層出土分については流れ込みのものと思われる。調査区北側での出土が多い。



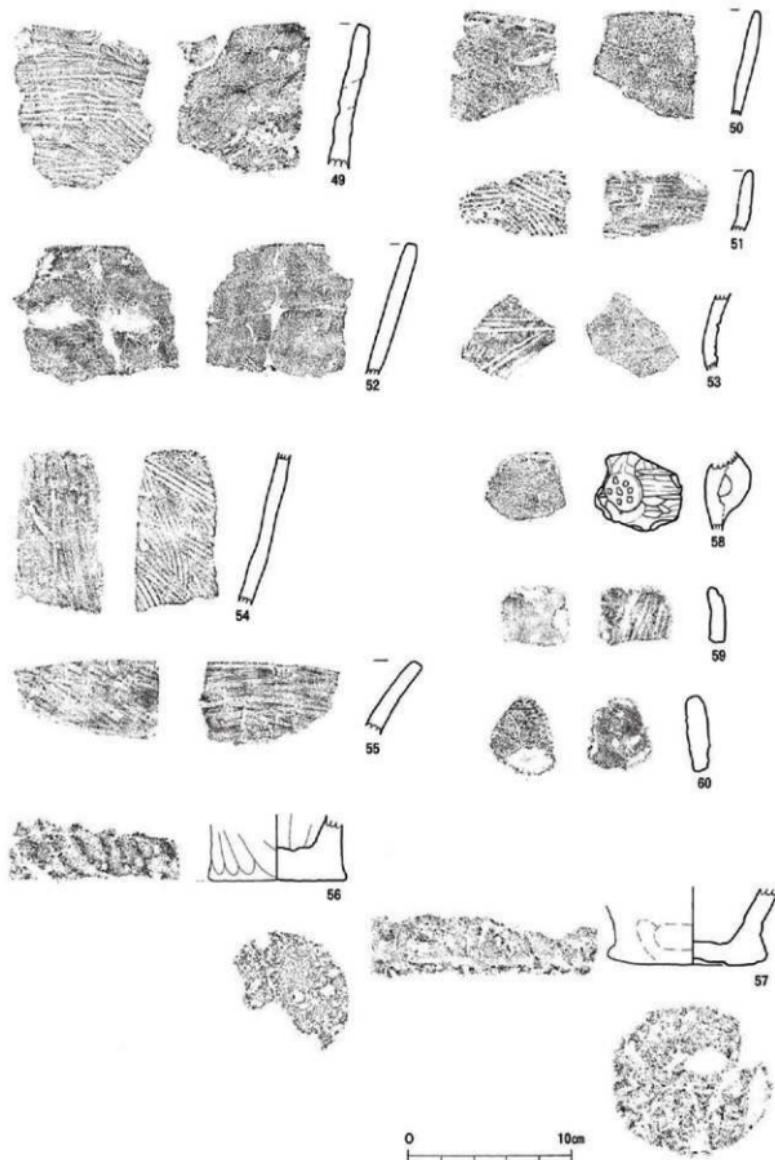
第20図 石錘出土層・石材・法量別分類比較図



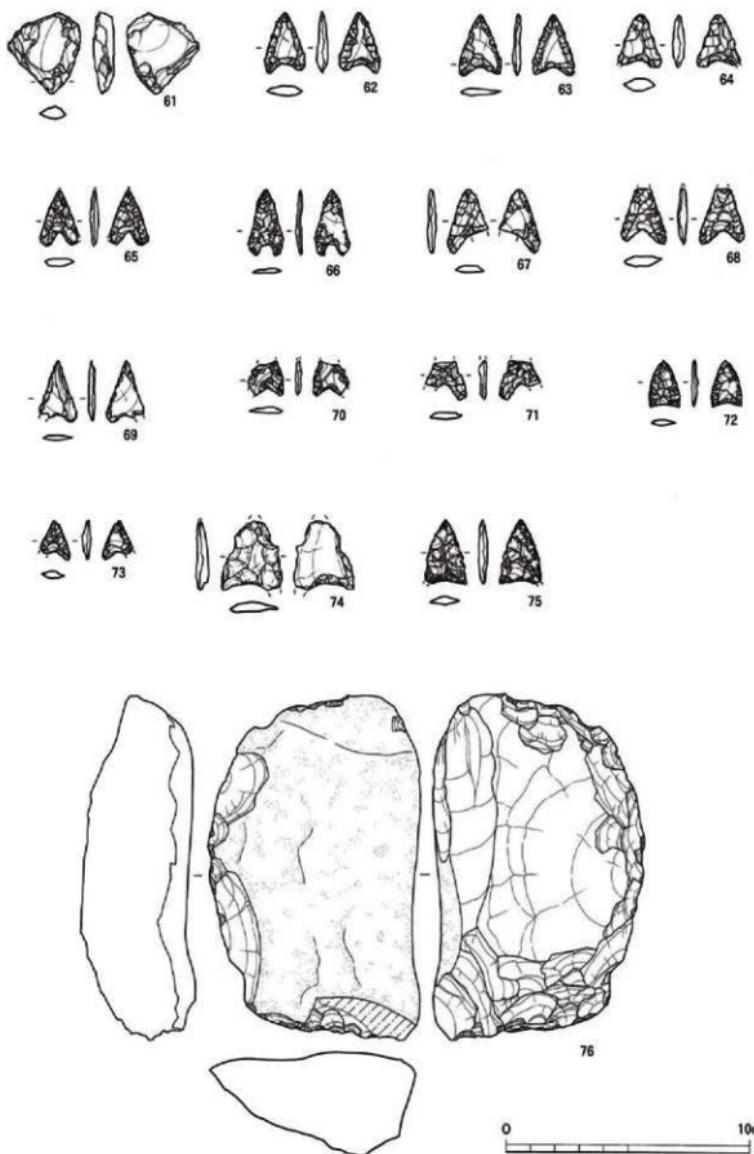
第21図 繩文時代出土土器実測図（1）(S=1/2)



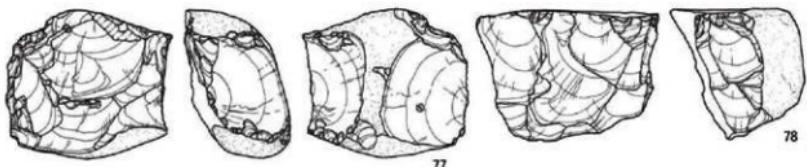
第22図 繩文時代出土土器実測図（2）(S=1/3)



第23図 繩文時代出土土器実測図（3）(S=1/3)



第24図 縄文時代出土石器実測図（1）(S=1/2)



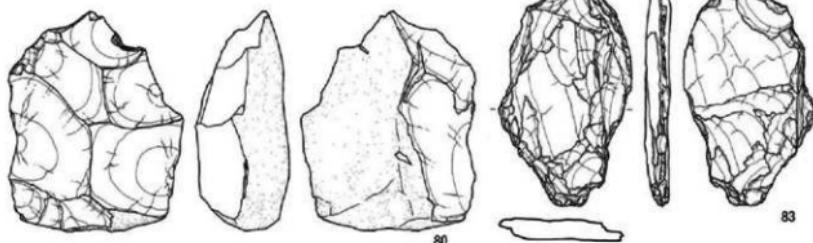
77

78

79

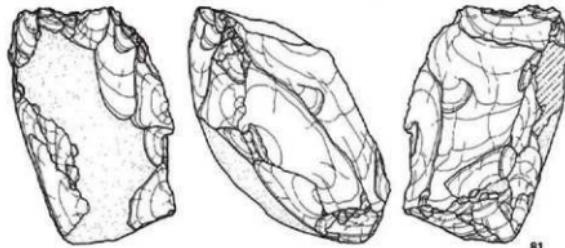
80

81

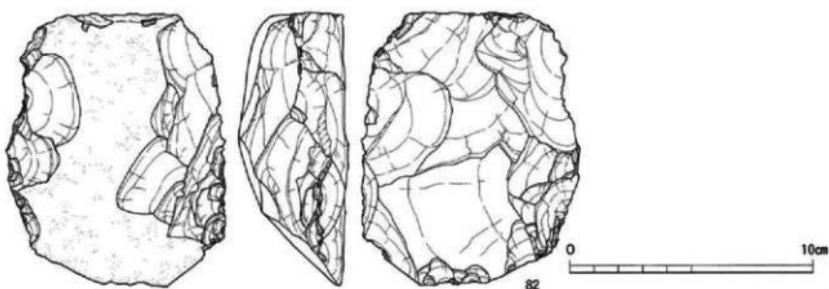


82

83



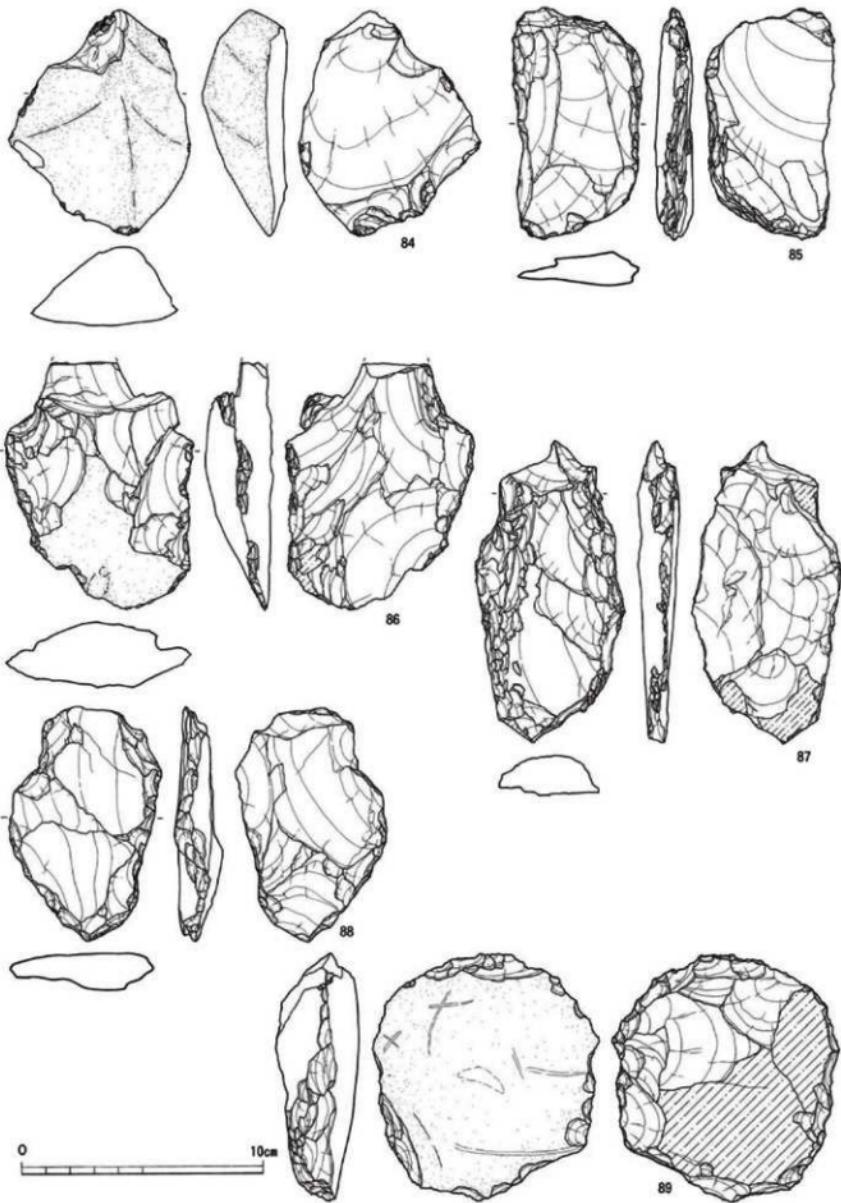
87



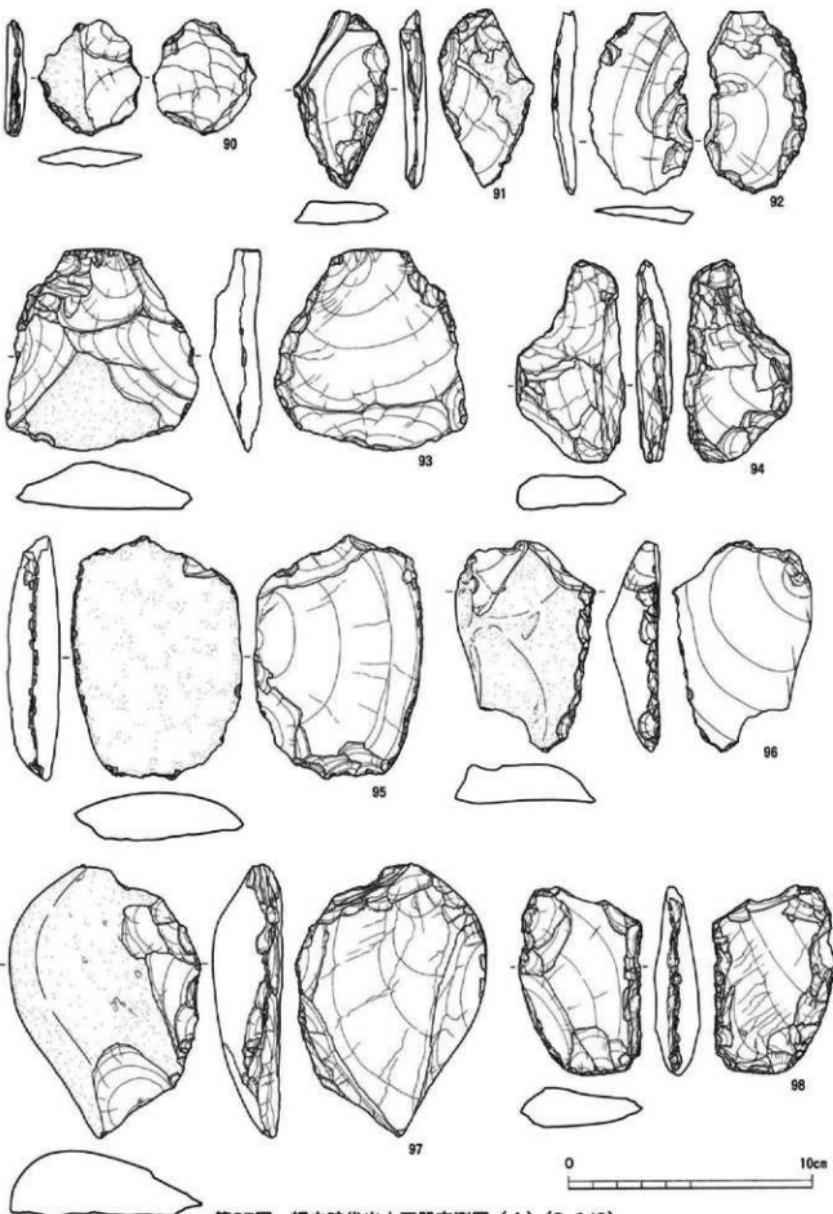
0

10cm

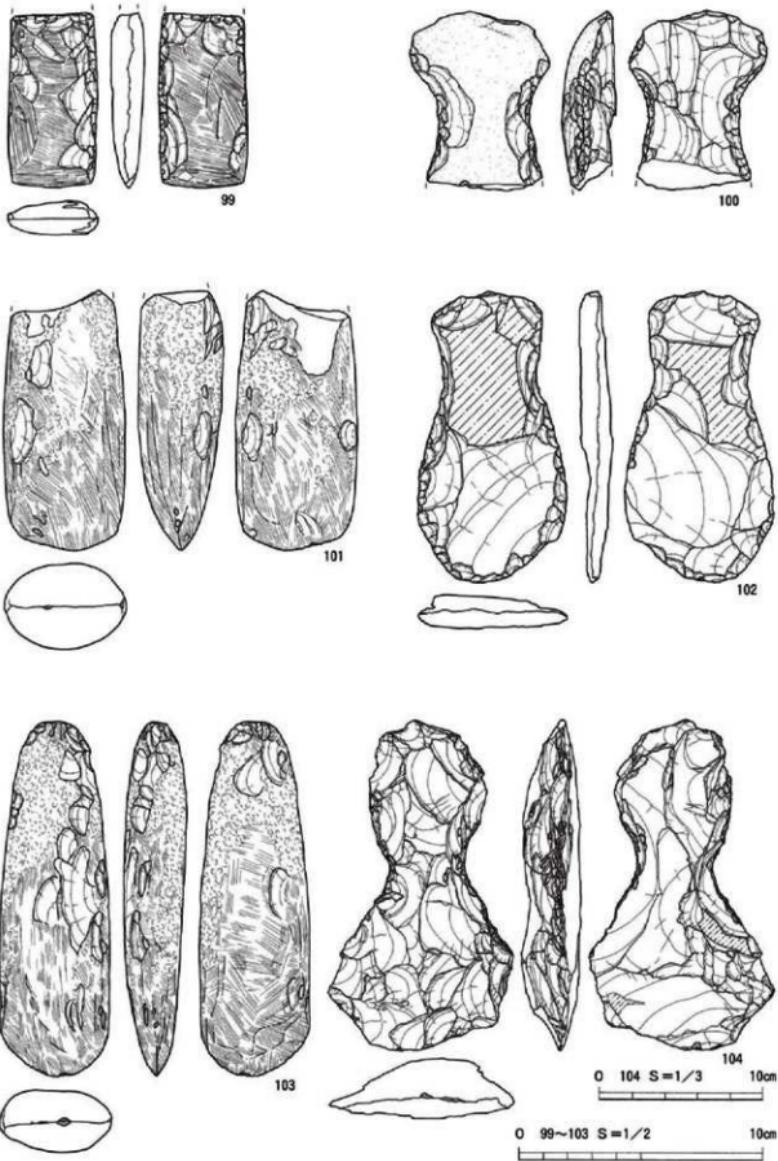
第25図 繩文時代出土石器実測図（2）(S=1/2)



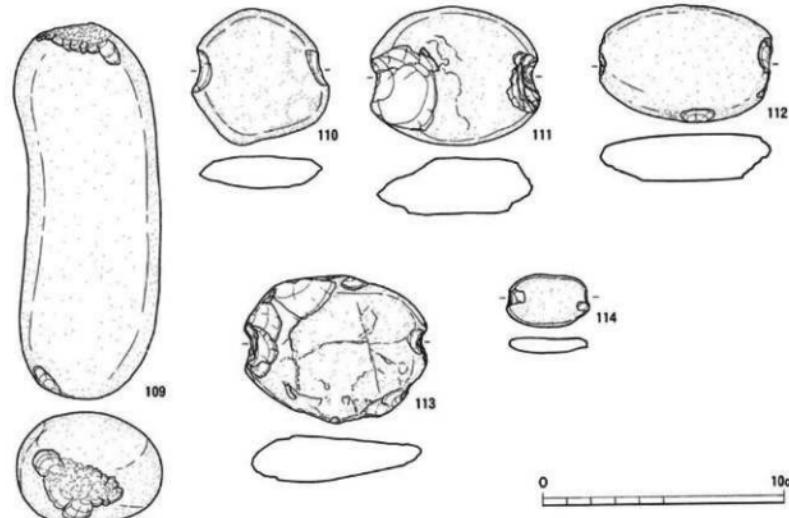
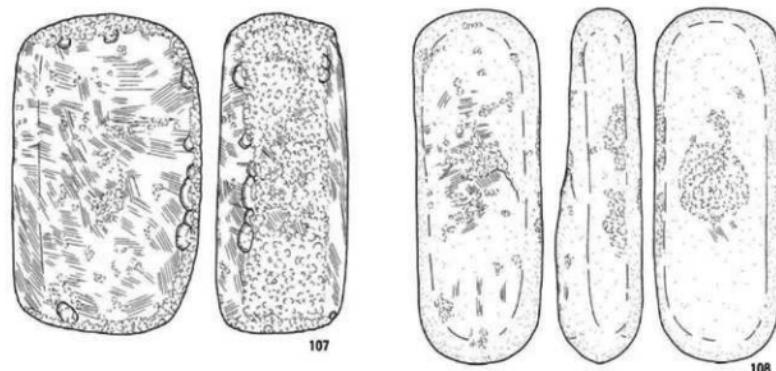
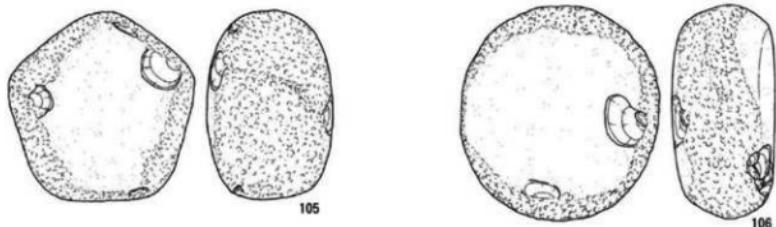
第26図 繩文時代出土石器実測図（3）(S=1/2)



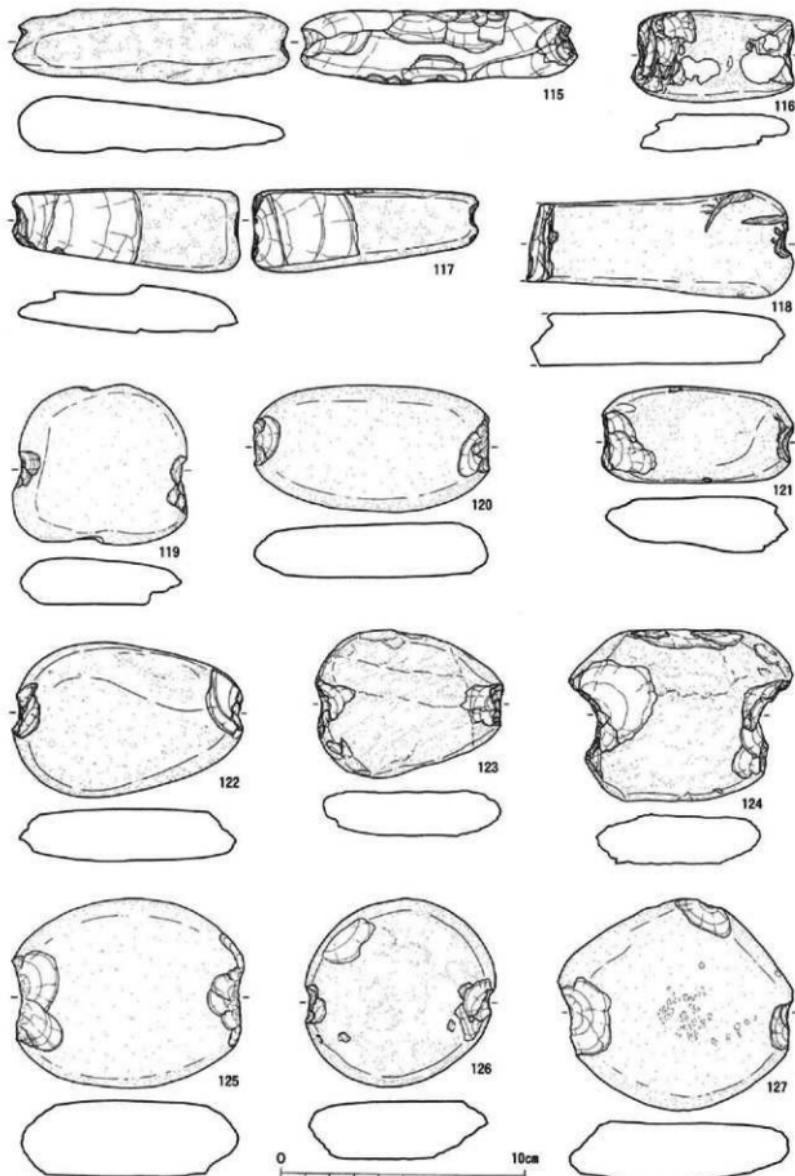
第27図 繩文時代出土石器実測図（4）(S=1/2)



第28図 縄文時代出土石器実測図（5）(S=1/2/1/3)



第29図 縄文時代出土石器実測図（6）(S=1/2)



第30図 繩文時代出土石器実測図（7）(S=1/2)

第4節 古墳時代以降の遺構と遺物

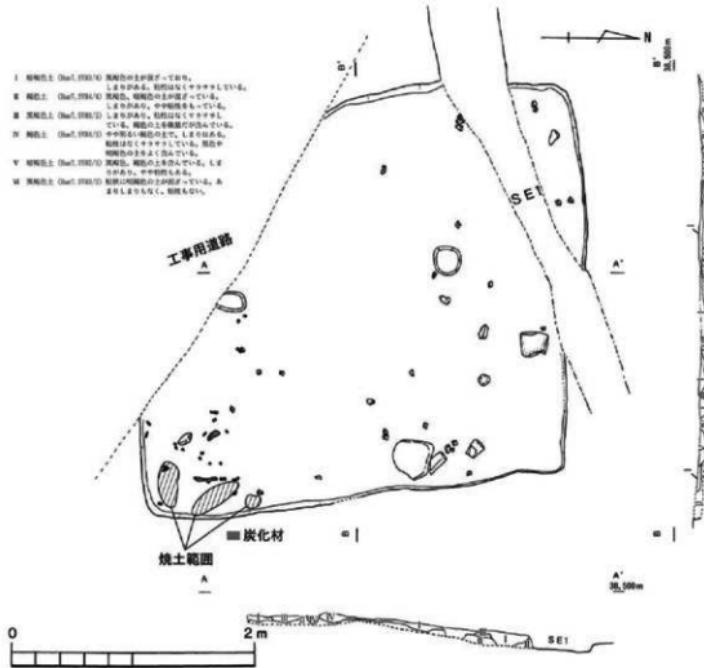
古墳時代以降の遺構・遺物確認されている。調査区の西側で、竪穴住居跡が1軒検出された。また、住居跡の埋土中から、古墳時代中期頃の土師器の甕の胴部片が出土している。また、第V層からではあるが、須恵器の环蓋の天井部片が出土している。また、近世のものと思われる炮烙も出土している。

遺構

竪穴住居跡（第31図）

調査区の西側で、溝状遺構（SE 1）に切られた形で検出された。MB 0（第V層）での検出であった。一部、住居の西側が工事用道路にかかっており、完全に検出することはできなかった。床面は、樹痕の影響で状態はあまり良くなかった。また、S

E 1に切られており、S E 1側は現存していないと思われる。3.2m × 3.5m × 0.30mの方形のプランで、主柱穴は2本柱である。柱穴の規模は、径20cm、深さ約20cmである。調査時は住居内の出土遺物が、縄文時代後・晩期の土器がほとんどであることから、縄文時代後期から弥生時代にかけての住居跡ではないかと思われたが、時期の特定の決め手になる遺物がないことから、住居より検出された焼土下の炭化材で¹⁴C年代測定を行ったところ、1495±20年BP（565AD）という結果が得られた。出土遺物と¹⁴C年代測定の結果に違いが見られるものの、時期は多少ずれるが住居の埋土中から土師器の甕の胴部片が出土していること、また本遺跡の北側の野首第2遺跡にも古墳時代の集落が、東側に山王古墳群があることを考慮し、この住居跡については、古墳



第31図 SA 1 実測図及び遺物出土状況・土層断面図 (S = 1/40)

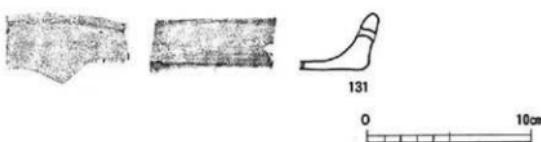
時代後期から古代にかけてのものであると判断した。ただし、野首第2遺跡の古墳時代中期の集落より新しいものになる。住居内より、出土した縄文時代後・晚期の土器については、埋土中のものもあり、削平による流れ込みによるものと考えられる。

出土遺物（第32図128～131）

128は、須恵器の壺蓋の天井部である。内外面ともナデが施されている。第V層からの出土ではあるが、斜面地でもあり溝状構造（S E 2）付近の出土から流れ込みと思われる。

129・130は、土師器の壺の胴部片である。129は、内面はナデ、外面は工具による格子状のタタキ目が施されている。

131は炮烙の口縁部で、内外面とも横方向のナデが施されている。外面にはススが付着している。



第32図 古墳時代以降出土土器実測図 ($S = 1/3$)

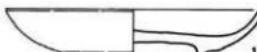
第5節 近・現代の遺物

銅板転写皿（第33図132）

擾乱からの出土ではあるが、ほぼ完形品である。明治末期から昭和の第二次世界大戦前まで作られていたものである。口径が15.8cm、底径8.2cm、器高が3.0cmである。内外面ともに回転ナデ、施釉が施されている。内面に仙人と思われる人物が8人描かれている。

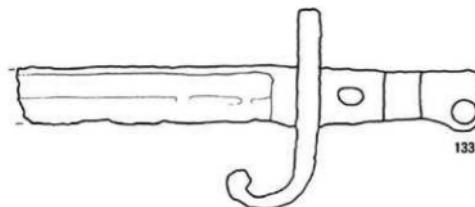
銃剣（第33図133）

一次調査の確認調査時に出土した。刀身は鍔より11.5cmで破損しており、全体が鍔で覆われている。鍔や束の形状・寸法から村田二十二年式の銃剣である。この銃剣は、日本軍に明治22年に配備された村田連発銃用の銃剣であり、完形品の刃長は、28cmで諸刃の刃身を持つ。鍔・柄頭・留め具等の残存状況は良いが、鍔により鍔中央に印された菊の紋章と柄頭に刻まれた製造番号は確認できなかった。



132

0 132 S = 1/3 10cm



133



0 133 S = 1/2 10cm

第33図 近・現代出土遺物実測図 (S = 1/2・1/3)

第6節 時期不明の遺構

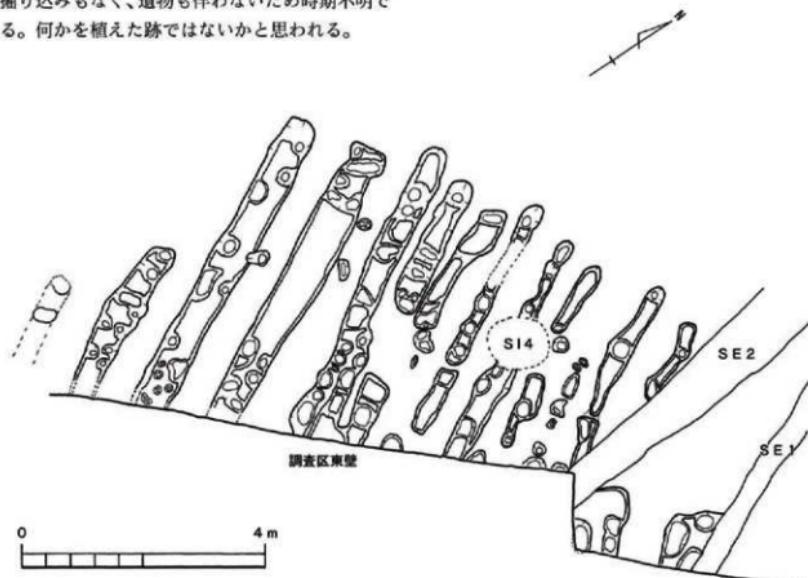
調査区の北側よりに西側から東側にかけて伸びるMB 0(第V層)上面で検出された溝状遺構(SE 1・SE 2)は、SE 1が古墳時代後期から古代にかけての堅穴住居跡を切っていること、明確な時期を特定できる遺物を伴わなかったことから、時期不明とした。西側から東側に伸びているものであり、一次調査検出の溝状遺構との関連は確認できなかった。また、調査区の東側で擾乱を取り除いたところ、性格不明な複数の溝状遺構も検出した。

性格の不明な溝状遺構(第34図)

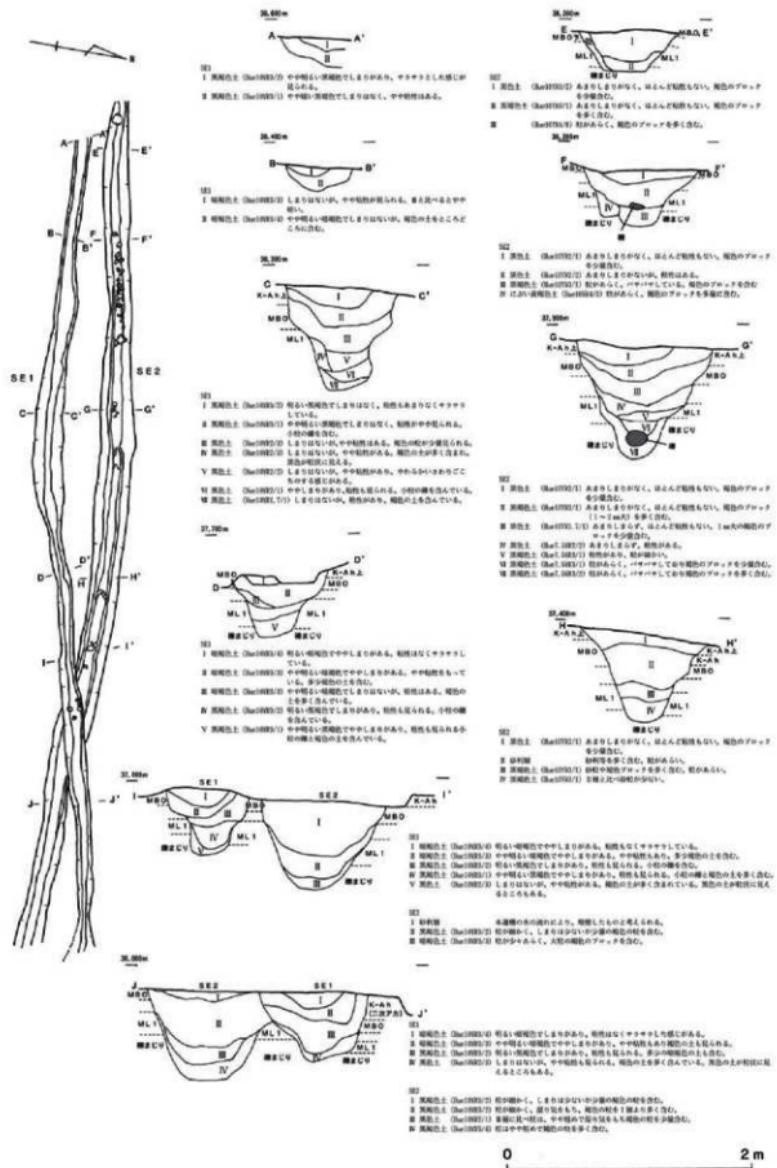
調査区の東側で、ML 1(第VI層)上の擾乱を掘削し、取り除いたところ性格不明な複数の溝状遺構を検出した。長さが2m～5m、幅が30cmから60cm程度のもので、溝の中に数多くのピットが存在した。ピットの多数は樹根と思われる。壁際に明確な掘り込みもなく、遺物も伴わないので時期不明である。何かを植えた跡ではないかと思われる。

溝状遺構(第35図)

調査区の北側で、調査区の西端から東端まで約35mの長さがある。幅は約1.5m、深さは最大90cmである。調査区の東側でSE 1・SE 2の切り合いが見られる。SE 1は床面に礫は見られないが、SE 2は、上部及び切り合いの付近に礫が人為的に置かれたように並んで出土した。また、SE 2は床面付近がやや箱掘りになっており、数箇所に段差があることから、礫の出土も含めて、水の流れを調整するためのものではないかと思われる。SE 1は自然流路、SE 2は人為的に掘られたものと判断した。



第34図 性の不明な溝状遺構実測図 ($S = 1/80$)



第35図 溝状構造実測図 ($S=1/200$) 及び断面図 ($S=1/40$)

第V章 自然科学分析の結果

第1節 自然科学分析の目的

本遺跡の主体は縄文時代後・晚期であり、数多くの縄文時代後・晚期の遺物が出土している。また、縄文時代早期の集石遺構5基、竪穴住居跡も1軒検出されている。しかし、竪穴住居跡や集石遺構から出土した遺物が少なく、遺物から年代を特定する情

報を得ることが困難であった。そこで住居跡や集石遺構から出土した炭化材から年代を特定するための有用な情報を得るために放射性炭素年代測定、また住居跡で検出された炭化材から、住居で使用されていたと思われる樹種を明らかにするため樹種同定の自然科学分析を行うこととした。

第2節 放射性炭素年代測定

1 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
NO. 1	S A 1, ②	炭化材	超音波煮沸洗浄、酸-アルカリ-酸洗浄	A M S
NO. 2	S A 1, ⑤	炭化材	超音波煮沸洗浄、酸-アルカリ-酸洗浄	A M S
NO. 3	S I 1, C-7	炭化材	超音波煮沸洗浄、酸-アルカリ-酸洗浄	A M S
NO. 4	S I 3, 炭化物2	炭化材	超音波煮沸洗浄、酸-アルカリ-酸洗浄	A M S

A M S : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

2 測定結果

試料名	測定NO. (P E D -)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代	
				1 σ (6.8%確率)	2 σ (9.5%確率)
NO. 1	7892	-26.13 ± 0.13	1495 ± 20	555AD(68.2%)600AD	535AD(95.4%)615AD
NO. 2	7893	-28.33 ± 0.12	1455 ± 20	590AD(68.2%)640AD	565AD(95.4%)645AD
NO. 3	7894	-26.90 ± 0.13	9460 ± 30	8790BC(66.0%)8710BC 8670BC(2.2%)8650BC	8830BC(95.4%)8630BC
NO. 4	7895	-26.10 ± 0.11	9295 ± 30	8610BC(51.5%)8530BC 8510BC(16.7%)8480BC	8640BC(95.4%)8440BC

BP : Before Physics(Present), BC : 紀元前, AD : 紀元後

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(2) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた(実際の半減期は5730年)。統計誤差は1σ(68%確率)

である。

(3) 暦年代

^{14}C 年代測定値を実際の年代値(暦年代)に近づけるため、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを校正する必要がある。暦年校正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年の比較により作成され ^{14}C 年代された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC24050年までの換算が可能である(樹木年輪データはBC10450年ま

で)。

曆年代は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅で示し、較正プログラム OxCal3.1の確率法により 1σ (68%確率)と 2σ (95%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に曆年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

3. 所見

加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定の結果、No.1では 1495 ± 20 年BP (2σ) の曆年代で AD555~615年)、No.2では 1455 ± 20 年BP (AD565~645年)、No.3では 9460 ± 30 年BP (BC8830~8630年)、No.4では 9295 ± 30 年BP (BC8640~8440年) の年代値が得られた。

参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, p.1029-1058.
- 尾崎大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ、学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3-炭素年代測定による高精度編年体系の構築-, p.14-15.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3-20.

第3節 樹種同定

1. 試料

試料は、SA1(堅穴住居跡)から採取された炭化材3点である。

2. 方法

試料を割折して新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目)、接線断面(板目)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

遺構	試料	結果(学名/和名)
SA1	炭化材③	<i>Quercus sect. Aegilops</i> コナラ属クヌギ節
SA1	炭化材④	<i>Quercus sect. Aegilops</i> コナラ属クヌギ節
SA1	炭化材⑤	<i>Meliosma</i> アワブキ属

主要な分類群の顕微鏡写真(図版9)を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属クヌギ節

Quercus sect. Aegilops ブナ科

横断面: 年輪のはじめに大型の道管が1~3列配列する環孔材である。晚材部では厚壁で丸い小道管が単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晚材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面: 道管の穿孔は單穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面: 放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15 m、径60 cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科

横断面：小型の道管が単独ないし2～4個放射方向にむかって複合して散在する散孔材であるが、その複合部に1～2個の柔細胞をはさんでいるものが見られる。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。アワブキ、ヤマビワ、ミヤマホウソなどがあり、落葉または常緑の低木から高木である。

4. 所見

分析の結果、S A 1（豎穴住居跡）から採取された炭化材は、コナラ属クヌギ節2点、アワブキ属1点と同定された。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、いずれも弾力に富んだ強

い材である。温帯に広く分布する落葉広葉樹で、乾燥した台地や丘陵地に生育し、二次林要素でもある。アワブキ属は温帯に広く分布し、このうちアワブキは山地に生える落葉高木で、強さ中庸の材である。また、ヤマビワは暖地の常緑林内に生える常緑小高木、ミヤマホウソは山地に生える落葉低木である。いずれも当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

参考文献

島地謙・佐伯浩・原田浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造。文永堂出版、290p.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣、296p. 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成。植生史研究特別1号。植生史研究会、242p.

第VI章 まとめ

【旧石器時代】

A区での旧石器時代の遺構・遺物は見られなかつたが、B区では、Kr-kb（第VII層）で礫群を検出、第XI層よりナイフ形石器・石核・剥片が出土した。広い範囲での調査を行つたが、調査区の中央部での出土だけであった。それ以外では、第XIV層まで掘り下げたが遺構・遺物は確認されなかつた。チップ等も見られず、また遺物の数も少なかつたこと、一次調査でも石斧1点のみの出土であったことから、他所より持ち込んだものではないかと判断した。

【縄文時代】

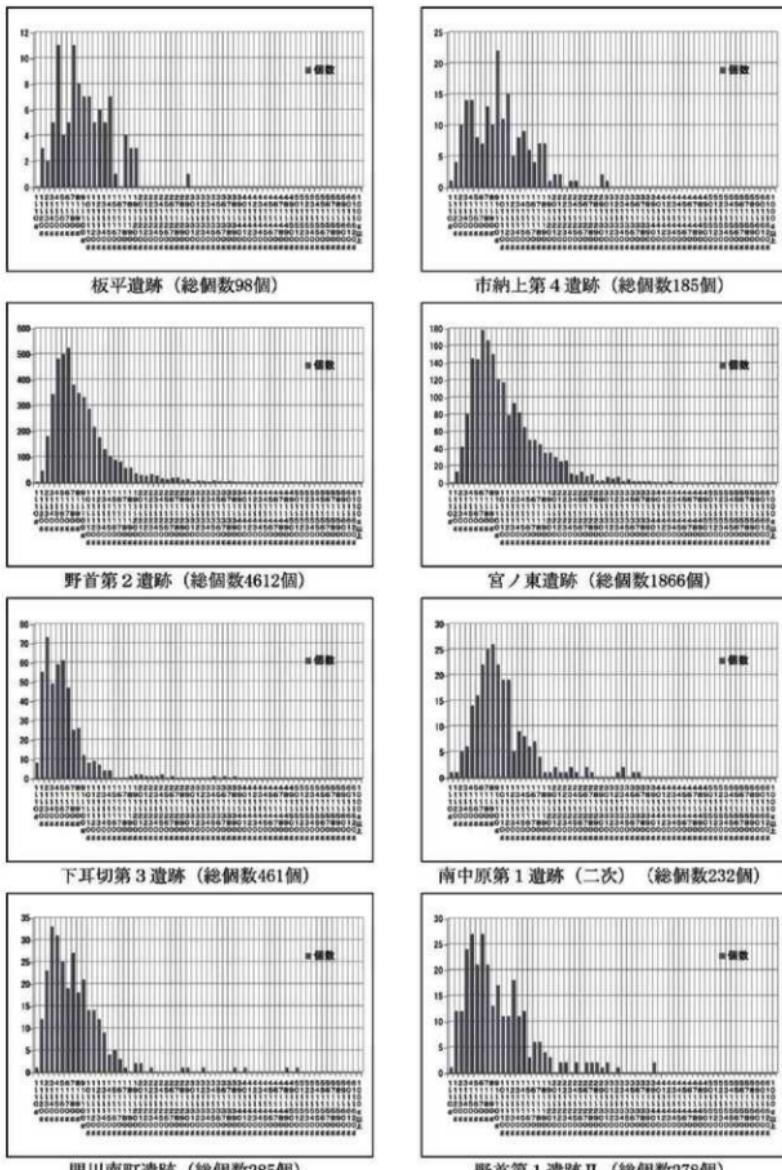
A区では、K-Ah（第IV層）が残存していたが、遺構は見られなかつた。遺物は一部、弥生土器の高环や土師器等の出土もあったが、ほとんどが後・晚期のものであった。B区では、調査区の北側のみK-Ahが残存し、中央部から南側にかけては、流出しており、ほとんど残っていない状況であった。遺構は、集石遺構・道状遺構・土坑・環状ピット群が検出されたが、集石遺構については、S I 1・S I 3から出土した炭化材の自然科学分析の結果から早期のものであるということは前述のとおりである。よってこの結果を踏まえて、一次調査での検出の集石遺構も早期にあたるのではないかと思われる。集石遺構について一次調査の分布との比較（第37図）をしたが、調査区の中央部から西側にかけて分布が見られる程度で、特に傾向は見られなかつた。使用される石材の構成については、散礫も含めて一次調査は尾鈴山酸性岩類が中心であるにに対して、二次調査では主に砂岩が中心となつてゐる。道状遺構・土坑については、明確な時期決定の資料に乏しいが、周辺からの遺物から後・晚期にあたるのではないかと判断した。一次調査でも道状遺構と思われる硬化面は検出されているが、関連は確認できなかつた。また、早期の層にあたる第VI層からの遺物の出土もあるが、整理作業での確認の結果、後・晚期の土器であった。流れ込みと考えられる。環状ピット群については、周辺の遺物から後・晚期のものと判断した。出土した石器は、明確な時期を

決定することはできないが、土器のほとんどが後・晚期のものであることから、おそらく後・晚期のものが多いのではないかと思われる。石斧については、ほとんどが欠損品であった。石錐は232点出土しているが、そのほとんどが第IV層までの出土であり、後・晚期が中心である。また石錐が多数出土した富高川流域に位置する板平遺跡（98点）、五十鈴川流域に位置する門川南町遺跡（285点）、平田川流域に位置する市納上第4遺跡（185点）、小丸川流域に位置する野首第1遺跡II（278点）、野首第2遺跡（4612点）、下耳切第3遺跡（461点）、一つ瀬川流域に位置する宮ノ東遺跡（1866点）、清武川の支流水無川流域に位置する竹ノ内遺跡（132点）、加江田川流域に位置する平畠遺跡（503点）と本遺跡の出土した232点の石錐を含めて、重量のみであるが、その傾向を比較（第38図）してみると、どの遺跡も数には違いがあるが、40g～70g程度の重さのものが使用される傾向にあると思われる。このことから、ある程度重さを確かめながら石錐用の石材を採取していくのではないかと考えられる。

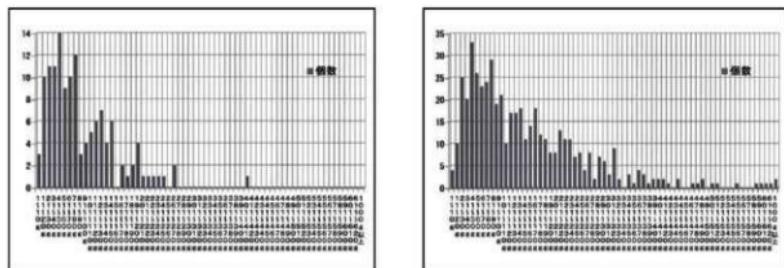
一次調査同様、調査区からは、石核・剥片・敲石等の出土はあったものの、チップ等は見られなかつたことから、生産・加工はあまり行わなかつたと思われるが、石斧を製作したであろう剥片類は出土している。本遺跡の北側に位置する野首第2遺跡は、未製品やチップ等当該期の石器製作場的な様相が見られるのに対して一次調査同様、本遺跡も主に消費の場であったと思われる。また遺構や遺物から本遺跡の生活の中心は、後・晚期であったのではないかと思われる。本遺跡からは、A区の高环を除いて、弥生時代の遺構・遺物は確認できなかつた。



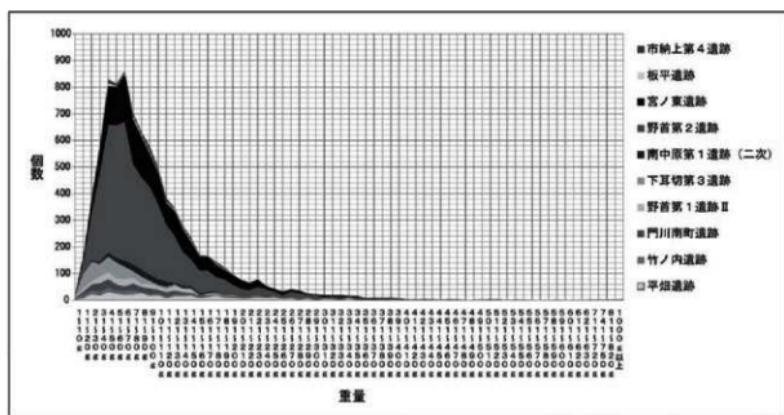
第36図 一次調査・二次調査集石遺構分布図 (S-1/2000)



第37図 各遺跡石錘重量分布図（1）



第38図 各遺跡石錘重量分布図（2）



第39図 各遺跡石錘重量比較図

【古墳時代～古代】

A区では、土師器片と須恵器片が出土した。B区では、堅穴住居跡が1軒検出されたが、明確な時期を決定する遺物が少なかったため、住居跡より出土した炭化材の自然科学研究の結果、古墳時代後期から古代にかけてのものであるという結果がでた。しかし、分析結果と住居内出土遺物の時期が異なることから、再度、整理作業により埋土中の遺物を確認したところ、時期が多少ずれるが土師器片を確認

した。他の遺物は、後・晩期のものでおそらく削平等の関係で流れ込んだものと思われる。また、住居の炭化材より樹種同定を行ったところ、コナラ属クヌギ節・アワブキ属と同定された。コナラ属クヌギ節には、クヌギとアベマキがあり、いずれも弾力に富んだ強い材、またアワブキは強さ中庸の材であり、住居材に使用されていたものと思われる。いずれの材も当時の本遺跡の周辺もしくは、近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

【近代】

明治末から昭和の第二次世界大戦前まで作られていた銅板転皿が出土したが、擾乱からであるため他所からのものであると思われる。また、今回一次調査の報告書に掲載できなかった銃剣を掲載することになった。銃剣は、既述の通り、村田二十二年式銃剣であり、明治22年に日本軍に採用されたが、主力として使用されていたのは、村田歩兵銃・連發銃に代わって三十年式歩兵銃が採用される明治30年までの8年間である。明治36年に三十年式歩兵銃が完備されて以降、村田二十二年式銃剣は軍内で使用されることはなかったが、日本軍が高鍋町に駐屯していた時期と照合すると、一次調査で出土した認識票と同じく第二次世界大戦時に使用されていたと考えるべきであろう。高鍋町に日本軍が駐屯していた大戦末期の物資不足は、補充員に前時代の銃を配備させねばならないほど逼迫していたのではないかと思われる。

(陸上自衛隊 都城駐屯地 田村曹長よりの御教示による。)

【参考文献】

- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集
『野首第1遺跡』2004
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第118集
『老瀬坂上第3遺跡』2005
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集
『下耳切第3遺跡』2006
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第126集
『唐木戸第4遺跡』2006
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第158集
『野首第2遺跡第1分冊』2007
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第162集
『南中原第1遺跡(一次)』2007
- 高鍋町教育委員会『高鍋町史』1987
- 埋蔵文化財発掘調査報告書
『門川南町遺跡』1996 宮崎県教育委員会
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第121集
『市納上第4遺跡』2006
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第157集

『野首第1遺跡II』2007

- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集
『竹ノ内遺跡』2000
- 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集
『平畠遺跡』1985 宮崎県教育委員会
- 『しらべる戦争遺跡の事典』
十菱駿武・菊池 実 編 柏書房

試験番号	生土地点	出上層	種別	器種	部位	法量(m)	手法・調整・枝葉等		色調		施土の特徴	注記番号	備考
							内面	外側	内面	外側			
1 T-1	IV 地文土器	深鉢	口縁部	工具によるナデ	斜め(↖)方向のハケ目	赤褐色	黒褐色	2mm以下の乳白色の粒を含む。	b-42IV+				接合
2 T-1	IV 地文土器	深鉢	口縁部	工具によるナデ	斜め(↖)方向のハケ目 鉄文・沈文あり	赤褐色	黒褐色	1mm以下の乳白色の粒を含む。	b-63IV				
3 T-1	IV 地文土器	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ スス付着	黒褐色	黒褐色	3mm以下の黒色の粒を含む。	b-4IV上				
4 T-1	IV 地文土器	台付き皿	口縁部	手筋竹管による剥離	工具によるナデ	赤褐色	黒褐色	1mm以下の經年色の粒を多く含む。	b-4IV上				
5 T-1	IV 地文土器	直杯	高脚部	工具による剥離	橿方向のナデ 穿孔あり	淡褐色	黒褐色	2mm以下の黑色光沢粒、乳白色、黒褐色を含む。	b-3IV				
6 T-1	青土 古物	便	剥離	工具による剥離	工具によるナデ	赤褐色	黒褐色	3mm以下の乳白色を含む。	b-4IV上				
7 T-1	IV 地文土器	皿	剥離	心円タキ	心円タキ	灰黒	灰黒	きめ細かい灰褐色を多く含む。傾	b-6IV				
27 C2 地文土器	深鉢	口縁部	橿方向のナデ	橿方向のナデ	鉄文あり	赤褐色	黒褐色	1mm以下の褐色を含む。	b-S2d-C2				
28 C3 地文土器	深鉢	口縁部	橿方向のナデ	ミガキ 工具による剥離あり	赤褐色	黒褐色	1mm以下の乳白色の粒をわずかに含む。	b-297III					
29 C5 V 地文土器	浅鉢	剥離	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ 剥離あり	赤褐色	黒褐色	1mm以下の褐色を含む。	b-4IV上					
30 D4 地文土器	深鉢	口縁部	相手さえあり	相手さえあり	褐色	赤褐色	3mm以下の白色、乳白色の粒を含む。	b-31IV+				接合	
31 C2 IV 地文土器	深鉢	剥離	工具による剥離	工具による剥離	淡褐色	淡褐色	2mm以下の褐色と、1mm以下の乳白色を含む。	b-42IV上					
32 D3 V 地文土器	深鉢	口縁部	橿方向のナデ	橿方向のナデ 口縁上面に剥離	赤褐色	黒褐色	3mm以下の灰褐色、黑色光沢粒を含む。	b-209V					
33 C2 IV 地文土器	浅鉢	口縁部	橿方向のナデ ミガキ	ミガキ 口縁上面 斜め(↖)	赤褐色	黒褐色	2mm以下の乳白色を含む。	b-42IV上					
34 E3 地文土器	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	赤褐色	黒褐色	1mm以下の褐色を含む。	b-5A1					
35 E4 IV 地文土器	深鉢	口縁部	橿方向のナデ	口縫斜め(↖)方向のナデ 滅ぼす文	赤褐色	黒褐色	2mm以下の赤褐色を少し含み、1mm以下の褐色を多く含む。	b-163IV上					
36 C2 IV 地文土器	浅鉢	口縁部	鉄文	鉄文	赤褐色	黒褐色	2mm以下の黑色、赤褐色の粒を含む。	b-42IV上					
37 C2 IV 地文土器	浅鉢	口縁部	橿方向のナデ	工具による剥離文	赤褐色	黒褐色	2mm以下の黒色の粒を含む。	b-42IV上					
38 C4 IV 地文土器	深鉢	口縁部	橿方向のナデ 上縁上面に剥離	橿方向のナデ 剥離文あり	赤褐色	黒褐色	1mm以下の乳白色、淡黄色を含む。	b-151IV上					
39 E3 地文土器	深鉢	剥離	橿方向のミガキ	ミガキ ミガキ	赤褐色	黒褐色	1mm以下の赤褐色を含む。	b-5A1-11					
40 C2 IV 地文土器	深鉢	剥離	ナデ	ナデ	赤褐色	黒褐色	2mm以下の黑褐色を含む。	b-42IV上					
41 E3 IV 地文土器	深鉢	剥離	斜め(↖)方向の剥離文	方向不定の剥離文	赤褐色	黒褐色	1mm以下の白色、乳白色をわずかに含む。	b-137IV上+					
42 C2 S2d 地文土器	深鉢	口縁部	橿方向のナデ 錆文文	相手さえあり	赤褐色	黒褐色	1mm以下の乳白色の粒を含む。	b-S2d-C2					
43 C7 V 地文土器	深鉢	口縁部	ナデ	スス付着 ナデ	赤褐色	黒褐色	1mm以下の白色、黒褐色の粒を含む。	b-163V					
44 C4 IV 地文土器	深鉢	口縁部	相手さえあり	相手さえあり	赤褐色	黒褐色	1mm以下の赤褐色と、1mm以下の黒褐色を含む。	b-125IV上					
45 C2 IV 地文土器	深鉢	口縁部	剥離	横方向のナデ	黒褐色	赤褐色	2mm以下の白色の粒を含む。	b-42IV上					
46 C3 VI 地文土器	深鉢	口縁部	橿方向のナデ	橿方向のナデ	赤褐色	黒褐色	2mm以下の赤褐色の粒を含む。	b-337IV+				接合	
47 S-カクラン 滅ぼす 地文土器	深鉢	口縁部	横方向のナデ 用意見えあり	横方向のナデ 上縁上面に剥離文	赤褐色	黒褐色	1mm以下の乳白色、赤褐色の粒を含む。	b-カクラン					
48 C3 S2d 地文土器	深鉢	口縁部	橿方向のナデ	相手さえあり	赤褐色	黒褐色	1mm以下の赤褐色を含む。	b-S2d-C3					
49 E4 IV 地文土器	深鉢	口縁部	ナデ	相手さえあり	赤褐色	黒褐色	2mm以下の白色、赤褐色の粒を多く含み、1mm以下の乳白色を含む。	b-4IV上					
50 D6 S2d 地文土器	深鉢	口縁部	ナデ 田植え見えあり	ナデ 田植え見えあり	赤褐色	黒褐色	1mm以下の赤褐色を少し含む。	b-S2d					
51 C7 V 地文土器	深鉢	口縁部	相手さえ見えぬるナデ	相手さえ見えぬるナデ	赤褐色	黒褐色	1mm以下の白色、2mm以下の赤褐色の粒を含む。	b-171V					
52 S2d SEI 地文土器	深鉢	剥離	丁寧なナデ	ナデ スス付着	赤褐色	黒褐色	1mm以下の白色、黒褐色を含む。	b-S2d-SEI					
53 E4 IV 地文土器	深鉢	剥離	相手さえあり	鉄文文	赤褐色	黒褐色	1mm以下の白色、黒褐色の粒を含む。	b-108IV上					
54 E2 SEI 地文土器	深鉢	剥離	相手後のナデ	相手後のナデ 斜め(↖)方向のナデ	赤褐色	黒褐色	1mm以下の乳白色を含む。	b-S2d-SEI					
55 O6 V 地文土器	深鉢	口縁部	日向赤斑症の横方向のナデ	日向赤斑症の横方向のナデ	赤褐色	黒褐色	1mm以下の白色、黒褐色を多く含む。	b-181IV					
56 C2 IV 地文土器	深鉢	剥離	相手さえあり	スス付着	赤褐色	黒褐色	2mm以下の赤褐色を含む。	b-42IV上					
57 B4 IV 地文土器	深鉢	剥離	ナデ	ナデ	赤褐色	黒褐色	1mm以下の白色を多く含み、3mm以下の赤褐色の粒を含む。	b-108IV上					
58 S-カクラン 滅ぼす 地文土器	深鉢	剥離	ミガキ	ミガキ 工具によるナデ 鉄文文	赤褐色	黒褐色	1mm以下の赤褐色、2mm以下の乳白色の粒を含む。	b-カクラン					
59 C3 S2d 地文土器	加工土器	剥離	ナデ	ナデ スス付着	赤褐色	黒褐色	1mm以下の赤褐色、黑色、白色、灰色の粒を含む。	b-S2d-C3					
60 E3 S4 地文土器	加工土器	剥離	ナデ	ナデ スス付着	赤褐色	黒褐色	1mm以下の褐色、棕色、灰白色を含む。	b-S4-12					
120 B4 V 地文土器	穴鉢	穴鉢	ナデ	ナデ	赤褐色	黒褐色	2mm以下の赤褐色を含む。	b-221V					
123 表鉢 表鉢	剥離	口縁部	横方向のナデ	横方向のナデ スス付着	赤褐色	黒褐色	2mm以下の赤褐色を含む。	b-表鉢					
130 S-カクラン 滅ぼす	剥離	口縁部	斜め(↖)方向ナデ	斜め(↖)方向ナデ	黒褐色	黒褐色	1mm以下の赤褐色を含む。	b-カクラン					
131 E3 S4 地文土器	土器	剥離	ナデ	工具によるタキ目	赤褐色	黒褐色	1mm以下の赤褐色、1mm以下の赤褐色を含む。	b-5A-19					
132 E3 S4 地文土器	土器	剥離	ナデ	ナデ	赤褐色	黒褐色	1mm以下の赤褐色を含む。	b-S4-2					
133 一次焼成 にて出土	鉄器	鉄剝	ナデ	全体が削り離れており。	赤褐色	黒褐色	赤褐色を含む。						

第3表 土器観察表

報告書番号	器種	出土地点					石材	注記番号	備考
		グリッド	層	最高点(m)	最大幅(m)	最大厚(cm)			
8	二次加工剥片	T-2	IV上	10.6	7.2	1.3	123.8	カルシフェルス	2AV上
9	二次加工剥片	T-2	IV上	8.3	7.4	0.9	67.5	カルシフェルス	2AV上
10	石核	AII	表層	8.2	9.0	3.5	315.5	カルシフェルス	ミナカ2
11	石核	AII	キャット	9.3	11.2	5.1	256.2	カルシフェルス	24キャクド
12	円盤状石器	T-1	IV上	8.5	7.1	1.4	100.3	カルシフェルス	2AV上
13	石核	T-2	V1	2.3	1.2	0.3	1.0	チャート	2887VI
14	石核	T-1	IV上	4.2	4.5	1.1	29.4	砂岩	2AV上
15	石核	T-1	IV上	4.6	6.1	1.8	71.3	カルシフェルス	2A1BV
16	石核	AII	IV	13.5	5.9	3.6	281.3	カルシフェルス	24 4 IV
17	砾石	AII	IV上	17.2	8.6	4.9	1160.8	砂岩	2AV上
18	石片	AII	キャット	15.1	6.7	3.4	494.6	カルシフェルス	24キャクド
19	ナイフ形石器	CII	1	1.8	1.0	0.5	9.7	細面石(櫛目)	2887V
20	ナイフ形石器	BII	V1	5.5	2.0	1.0	1.7	カルシフェルス	2575VII
21	ナイフ形石器	BII	X	5.8	2.5	0.9	5.9	カルシフェルス	2575X
22	石核	CII	2	7.4	2.6	3.3	131.7	カルシフェルス	2888X
23	石核	BII	X	4.2	4.2	2.3	38.1	カルシフェルス	2889X
24	石核	EII	X	6.8	5.1	4.7	134.4	カルシフェルス	2890X
25	石核	EII	X	4.7	4.3	3.0	76.6	カルシフェルス	2890X
26	石核	EII	X	7.7	4.3	3.7	88.3	カルシフェルス	2892X
61	石核	EII	V1	3.1	3.0	0.9	8.8	チャート	2892V
62	石核	BII	カララン	2.4	1.6	0.5	1.4	カルシフェルス	28カララン
63	石核	CII	V1	2.4	1.6	0.3	1.1	カルシフェルス	28カララン
64	石核	EII	V	2.1	1.7	0.5	1.4	カルシフェルス	2832V
65	石核	EII	V1	2.2	1.5	0.3	0.9	チャート	2846V1
66	石核	EII	III	2.8	1.4	0.3	0.8	チャート	2846III
67	石核	DII	III	2.4	1.8	0.4	0.7	細面石(櫛目)	2826III
68	石核	DII	V	1.8	0.4	1.1	細面石(櫛目)	2826V	
69	石核	DII	V	2.5	1.5	0.3	0.7	カルシフェルス	2820V
70	石核	BII	IV上	1.4	0.3	0.5	0.5	細面石(査ノ木)	281V上[14]
71	石核	EII	IV上	1.5	0.3	0.7	0.7	細面石(査ノ木)	2803V上[14]
72	石核	EII	SC2	2.0	1.3	0.3	0.6	チャート	2803V上
73	石核	EII	IV上	1.5	1.2	0.3	0.4	細面石(査ノ木)	2824V
74	石核	EII	IV上	2.9	2.5	0.5	3.2	カルシフェルス	2802V上
75	石核	EII	V1	2.2	1.6	0.3	1.1	細面石(査ノ木)	2800V
76	細面	CII	SII	14.1	9.7	4.5	662.2	砂岩	2883C2
77	石核	BII	カララン	6.5	6.0	4.3	197.5	カルシフェルス	28カララン
78	石核	EII	V1	5.7	7.4	4.8	232.8	カルシフェルス	2886V1
79	石核	BII	IV上	8.6	5.2	3.0	205.0	カルシフェルス	28H上
80	石核	EII	V1	8.9	6.7	3.7	222.5	カルシフェルス	2834V1
81	石核	EII	V1	11.6	7.0	5.3	512.7	カルシフェルス	2838V1
82	石核	EII	V1	11.1	8.8	4.3	533.7	カルシフェルス	2827V1
83	二次加工剥片	CII	IV上	8.9	5.5	1.1	58.8	カルシフェルス	28V上
84	二次加工剥片	BII	キャット	9.0	7.3	3.4	185.1	カルシフェルス	28キャクド
85	二次加工剥片	CII	IV上	9.4	5.5	1.6	82.0	カルシフェルス	28H上
86	二次加工剥片	DII	IV上	10.2	7.8	2.8	197.9	カルシフェルス	2880V上
87	二次加工剥片	EII	SII	12.3	6.2	1.8	129.6	カルシフェルス	2882E2
88	二次加工剥片	CII	IV上	10.5	6.1	1.8	106.6	カルシフェルス	2804V上
89	円盤状石器	BII	カララン	10.0	9.5	3.5	383.8	カルシフェルス	ミナカ2
90	スクリーパー	CII	SEI	4.7	4.1	0.9	14.4	石英	2886
91	スクリーパー	CII	IV上	6.7	3.7	1.1	22.8	カルシフェルス	2887V上[131]
92	スクリーパー	DII	V	7.3	5.2	0.9	25.9	カルシフェルス	28H上
93	スクリーパー	CII	SEII	8.1	8.0	2.1	129.7	カルシフェルス	2886M2
94	スクリーパー	DII	V1	8.2	4.4	1.4	54.6	カルシフェルス	2886M2
95	スクリーパー	DII	V	9.8	6.8	2.0	178.2	砂岩	2880V上
96	スクリーパー	DII	V1	8.3	5.6	2.3	89.9	カルシフェルス	28154V
97	スクリーパー	DII	V1	6.8	7.7	2.9	258.0	カルシフェルス	28212V
98	スクリーパー	BII	表層	7.6	4.9	1.8	76.4	カルシフェルス	28H上
99	帶理石	BII	カララン	7.1	3.8	1.5	55.2	カルシフェルス	28カララン
100	帶理石	DII	SEI	7.1	5.8	2.3	98.1	カルシフェルス	2886E2
101	帶理石	CII	SEII	10.5	4.9	3.1	279.0	カルシフェルス	2886A1
102	帶理石	EII	IV上	11.7	6.1	1.4	95.5	カルシフェルス	2886V上
103	帶理石	CII	V1	14.6	4.5	2.4	247.7	カルシフェルス	2823V1
104	帶理石	BII	表層	20.0	11.2	3.6	669.8	カルシフェルス	ミナカ2
105	砾石	BII	SII	7.7	7.5	5.2	477.8	鈍頭山性岩類	2886B2
106	砾石	BII	IV上	7.7	8.0	4.3	475.0	鈍頭山性岩類	28V上
107	砾石	CII	SII	13.0	7.5	5.1	398.6	カルシフェルス	2883C2
108	砾石	CII	SII	14.5	5.2	3.3	474.7	砂岩	2883E2
109	砾石	BII	IV上	15.4	6.1	4.1	666.0	砂岩	2886V上
110	石核	EII	V	5.6	5.6	1.5	61.4	砂岩	2825V
111	石核	EII	V	5.7	7.0	2.0	133.5	カルシフェルス	28V上
112	石核	EII	IV上	4.7	7.0	2.0	97.8	砂岩	28V上
113	石核	DII	V	6.1	7.6	2.1	114.6	カルシフェルス	2818V
114	石核	CII	SEI	2.1	3.3	0.8	5.6	カルシフェルス	2886C2
115	石核	BII	カララン	3.4	11.2	2.0	111.9	カルシフェルス	28カララン
116	石核	BII	IV上	3.6	5.5	1.6	51.9	カルシフェルス	2826V上
117	石核	BII	キャット	3.4	9.2	2.2	92.8	カルシフェルス	28キャクド
118	石核	EII	IV上	4.3	-	2.1	169.1	カルシフェルス	2806V上
119	石核	CII	V	6.5	7.1	1.9	145.6	砂岩	28212V
120	石核	DII	V1	5.1	9.6	2.3	169.8	砂岩	28154V
121	石核	BII	SEI	3.9	7.7	2.3	103.9	カルシフェルス	2886E2
122	石核	CII	SEII	6.2	9.3	2.2	179.5	砂岩	2886C2
123	石核	BII	IV上	7.0	7.7	2.1	119.1	カルシフェルス	2886V上
124	石核	BII	表層	6.9	9.2	2.2	176.6	砂岩	ミナカ2
125	石核	BII	IV上	7.7	9.3	3.1	337.8	砂岩	28H上[131]
126	石核	BII	SEI	7.6	7.7	2.3	203.5	砂岩	2886B2
127	石核	BII	IV上	8.6	9.6	2.7	274.4	砂岩	2886V上

第4表 石器計測表

通し番号	岩種	出土地点	法 規					石材	備考(報告書番号)
			グリッド	標	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
134	石鍬	B5C	カクラン	7.3	8.9	2.5	235.2	砂岩	
135	石鍬	B5C	カクラン	4.7	5.5	1.4	50.2	砂岩	
136	石鍬	B5C	カクラン	4.2	5.4	1.4	45.6	砂岩	
137	石鍬	B5C	キャット	4.7	7.4	1.8	90.2	砂岩	
138	石鍬	C2	IV上	6.4	8.4	2.1	165.7	砂岩	
139	石鍬	B5C	IV上	6.3	6.8	2.5	149.0	砂岩	
140	石鍬	C3	S82	8.5	5.0	2.0	211.3	砂岩	
141	石鍬	V-2	III	5.7	-	2.2	85.3	砂岩	剥離のため扁なし 剥離のため厚さなし
142	石鍬	V-2	IV上	7.0	8.9	-	145.6	砂岩	
143	石鍬	B6S	V	7.4	8.6	3.2	263.9	カルシフェルス	
144	石鍬	C2	IV上	6.1	-	2.3	86.4	砂岩	剥離のため扁なし
145	石鍬	C3	S81	6.0	6.2	2.0	127.6	砂岩	
146	石鍬	B5C	IV上	5.3	5.9	1.8	71.0	砂岩	
147	石鍬	B5C	IV上	4.0	4.2	1.6	34.6	砂岩	
148	石鍬	B4Z	IV上	4.7	6.2	2.0	72.0	砂岩	
149	石鍬	O5	IV上	-	-	-	18.3	砂岩	剥離のため重さのみ
150	石鍬	C2	S6A	5.3	5.7	2.1	83.7	砂岩	
151	石鍬	O5	IV上	7.1	7.8	2.0	165.8	砂岩	
152	石鍬	E2Z	IV	4.0	6.2	1.7	61.7	砂岩	
153	石鍬	B4Z	IV上	3.9	5.9	1.8	41.4	砂岩	
154	石鍬	E2Z	IV	4.4	5.2	1.9	59.1	砂岩	
155	石鍬	O2	III	5.3	6.0	1.4	71.3	砂岩	
156	石鍬	B4Z	IV上	3.7	-	1.3	34.6	砂岩	剥離のため扁なし
157	石鍬	V-2	IV上	5.4	6.3	1.7	67.9	砂岩	
158	石鍬	O2	IV上	5.4	5.9	2.0	70.0	砂岩	
159	石鍬	D6Z	V	6.4	8.3	2.1	160.6	砂岩	
160	石鍬	D41	V	4.9	5.3	1.6	51.1	砂岩	
161	石鍬	C2	S6A	5.7	10.4	2.3	196.1	カルシフェルス	
162	石鍬	C3	S82	5.3	6.6	1.6	77.8	砂岩	
163	石鍬	E3	IV	6.3	6.4	2.6	132.2	尾鷲山性別岩類	
164	石鍬	V-2	III	5.8	7.0	1.6	100.4	砂岩	
165	石鍬	V-2	IV上	5.5	5.4	2.1	83.6	砂岩	
166	石鍬	T-3	IV	4.6	6.6	2.3	92.0	カルシフェルス	
167	石鍬	C3	S81	4.4	5.0	2.3	52.7	砂岩	
168	石鍬	T-3	IV上	5.8	8.1	1.9	141.4	カルシフェルス	
169	石鍬	B5C	カクラン	5.7	-	2.3	118.0	カルシフェルス	剥離のため扁なし
170	石鍬	B5C	赤鐵	5.1	5.6	2.1	81.0	カルシフェルス	
171	石鍬	T-3	IV上	6.5	-	2.3	154.0	砂岩	剥離のため扁なし
172	石鍬	B5C	カクラン	7.3	7.8	2.4	174.6	カルシフェルス	
173	石鍬	T-1	IV上	3.7	7.5	2.0	73.5	砂岩	
174	石鍬	T-1	IV上	3.2	-	1.9	80.6	カルシフェルス	剥離のため扁なし
175	石鍬	C2	IV上	3.3	-	1.3	61.5	カルシフェルス	剥離のため扁なし
176	石鍬	C3	IV上	6.8	7.0	2.8	167.9	砂岩	
177	石鍬	C2	S6A	7.1	8.7	2.8	232.2	尾鷲山性別岩類	
178	石鍬	B3S	IV上	5.8	6.1	1.7	72.2	砂岩	
179	石鍬	V-2	IV	5.9	6.2	1.9	88.5	砂岩	
180	石鍬	C2	S81	3.7	4.5	1.4	34.3	砂岩	
181	石鍬	B2Z	S81	3.8	-	1.4	28.2	砂岩	剥離のため扁なし
182	石鍬	T-1	IV上	6.1	6.8	2.1	74.2	カルシフェルス	
183	石鍬	C2	IV上	6.4	7.3	2.2	144.7	カルシフェルス	
184	石鍬	C2	IV上	6.6	8.0	2.8	173.6	カルシフェルス	
185	石鍬	C3	IV上	4.5	6.2	-	60.4	カルシフェルス	剥離のため厚さなし
186	石鍬	O5	IV上	4.9	7.4	1.7	83.4	カルシフェルス	
187	石鍬	O5	IV上	5.3	5.9	1.6	61.4	カルシフェルス	
188	石鍬	B6S	V	6.0	6.2	1.5	75.5	カルシフェルス	
189	石鍬	O5	IV上	4.8	7.1	1.9	95.4	カルシフェルス	
190	石鍬	C2	S82	6.7	9.5	2.2	207.1	カルシフェルス	
191	石鍬	O5	IV上	5.9	7.7	2.3	134.7	カルシフェルス	
192	石鍬	O5	IV上	5.3	9.6	1.8	105.7	カルシフェルス	
193	石鍬	C2	S82	4.7	7.0	1.5	62.6	カルシフェルス	
194	石鍬	C2	IV上	5.6	6.2	2.1	108.9	カルシフェルス	
195	石鍬	O5	IV上	6.0	6.2	2.2	114.7	カルシフェルス	
196	石鍬	T-1	IV上	4.4	5.2	1.3	41.5	砂岩	
197	石鍬	C2	S6A	-	-	-	35.7	カルシフェルス	剥離のため重さのみ
198	石鍬	C3	IV上	5.6	8.1	2.0	193.2	カルシフェルス	
199	石鍬	C2	IV上	5.3	6.2	1.7	75.9	カルシフェルス	
200	石鍬	C2	III	-	-	-	23.1	カルシフェルス	
201	石鍬	C3	S82	6.4	8.4	1.6	125.9	カルシフェルス	

第5表 石鍬計測表(1)

通し番号	岩種	出土地点	法規					石材	備考(報告書番号)
			グリッド	層	最大長(m)	最大幅(m)	最大厚(cm)	重量(t)	
202	石鍬	C4	IV上		6.4	7.3	2.0	113.1	ホルンフェルス
203	石鍬	C2	IV上		4.6	7.5	2.2	135.9	ホルンフェルス
204	石鍬	C2	IV上		4.8	7.4	1.9	86.3	ホルンフェルス
205	石鍬	B43	IV上		3.9	6.6	1.8	83.4	ホルンフェルス
206	石鍬	B3	SE1		6.9	8.1	1.9	130.3	ホルンフェルス
207	石鍬	B3	IV上		7.4	9.9	3.4	368.7	ホルンフェルス
208	石鍬	C2	SEA		6.5	7.3	2.0	106.0	ホルンフェルス
209	石鍬	C6	IV上		4.6	-	2.5	79.8	ホルンフェルス
210	石鍬	C2	IV上		6.0	6.3	1.6	77.2	ホルンフェルス
211	石鍬	C2	IV上		5.9	6.4	1.7	94.7	ホルンフェルス
212	石鍬	C2	IV上		4.5	5.2	1.2	45.0	ホルンフェルス
213	石鍬	B2	SEA		4.4	6.6	-	60.8	ホルンフェルス
214	石鍬	B5	SE1		8.5	8.5	1.5	75.0	ホルンフェルス
215	石鍬	C2	IV上		7.3	8.3	1.4	95.6	ホルンフェルス
216	石鍬	B52	V		4.9	7.3	2.0	96.6	ホルンフェルス
217	石鍬	C2	SEA		3.9	7.9	1.9	77.2	ホルンフェルス
218	石鍬	B52	V		5.1	7.1	1.5	77.0	ホルンフェルス
219	石鍬	C31	V		5.5	7.9	1.8	101.2	ホルンフェルス
220	石鍬	O6	IV上		6.7	-	1.6	102.9	ホルンフェルス
221	石鍬	O6	IV上		4.4	-	2.2	85.5	ホルンフェルス
222	石鍬	B42	IV上		5.0	7.0	1.3	61.5	ホルンフェルス
223	石鍬	B42	IV上		3.7	-	2.2	62.6	ホルンフェルス
224	石鍬	D44	IV		5.5	6.9	1.2	79.2	ホルンフェルス
225	石鍬	E33	V		6.3	8.4	1.3	106.4	ホルンフェルス
226	石鍬	B1	IV上		6.7	7.4	1.4	95.3	ホルンフェルス
227	石鍬	D41	V		6.4	6.5	1.5	88.5	ホルンフェルス
228	石鍬	B1	IV上		3.7	5.0	1.0	25.4	ホルンフェルス
229	石鍬	T-1	IV上		4.5	6.8	1.4	56.0	ホルンフェルス
230	石鍬	C7	SEA		5.9	8.8	2.1	129.6	ホルンフェルス
231	石鍬	C2	IV上		8.5	8.7	2.4	331.2	砂岩
232	石鍬	C5	SEA		8.7	9.1	3.1	328.6	砂岩
233	石鍬	C5	SEA		5.3	8.4	2.9	114.3	砂岩
234	石鍬	B42	IV上		5.6	7.0	2.0	118.9	砂岩
235	石鍬	C5	IV上		5.6	8.3	2.7	152.7	砂岩
236	石鍬	B2	IV上		4.4	5.3	1.6	51.5	砂岩
237	石鍬	B42	IV上		4.7	6.6	2.0	80.8	砂岩
238	石鍬	C2	IV上		6.1	9.0	1.5	104.5	砂岩
239	石鍬	R33	IV上		7.0	-	2.0	113.4	砂岩
240	石鍬	B21	V		5.0	-	1.4	50.7	ホルンフェルス
241	石鍬	B23	IV		5.6	-	2.2	86.0	砂岩
242	石鍬	C2	IV上		6.7	8.7	2.8	221.0	砂岩
243	石鍬	B2	SE1		5.1	7.0	1.9	106.1	砂岩
244	石鍬	A5K	キャット		9.6	10.5	2.1	359.2	ホルンフェルス
245	石鍬	A5K	キャット		5.1	6.7	1.7	91.8	砂岩
246	石鍬	A5K	キャット		5.2	6.0	1.3	45.1	ホルンフェルス
247	石鍬	T-2	IV上		4.5	8.4	2.1	112.9	ホルンフェルス
248	石鍬	A5K	キャット		5.8	6.8	1.2	92.7	ホルンフェルス
249	石鍬	A5K	表面		5.6	6.6	1.9	116.9	ホルンフェルス
250	石鍬	A5K	キャット		4.7	6.1	1.6	80.3	ホルンフェルス
251	石鍬	A5K	キャット		3.5	6.7	1.8	91.8	ホルンフェルス
252	石鍬	A5K	キャット		6.5	6.6	2.5	125.3	砂岩
253	石鍬	B5K	カクラン		6.0	7.9	1.7	88.3	砂岩
254	石鍬	B5K	カクラン		6.8	6.7	1.9	147.5	砂岩
255	石鍬	B5K	カクラン		5.8	6.4	1.6	72.7	砂岩
256	石鍬	B5K	カクラン		7.1	8.5	2.5	246.1	砂岩
257	石鍬	B5K	カクラン		5.2	8.1	1.9	122.8	砂岩
258	石鍬	B5K	キャット		6.2	6.6	1.9	114.2	砂岩
259	石鍬	B5K	カクラン		4.3	5.5	1.4	49.9	ホルンフェルス
260	石鍬	B5K	カクラン		4.3	5.3	1.7	53.3	砂岩
261	石鍬	B5K	カクラン		4.5	6.1	1.7	65.2	砂岩
262	石鍬	B5K	表面		4.9	5.8	2.0	83.2	砂岩
263	石鍬	B5K	キャット		4.6	4.8	0.8	25.0	ホルンフェルス
264	石鍬	B5K	表面		8.0	2.0	104.1	砂岩	
265	石鍬	B5K	カクラン		4.5	6.6	1.5	67.5	砂岩
266	石鍬	B5K	表面		5.5	-	-	63.0	砂岩
267	石鍬	B5K	カクラン		5.9	5.9	1.5	65.0	砂岩
268	石鍬	B5K	表面		4.9	5.6	1.7	62.4	砂岩
269	石鍬	B5K	カクラン		4.7	6.0	1.7	66.8	砂岩
270	石鍬	B5K	カクラン		4.5	5.5	1.8	56.1	砂岩
271	石鍬	B5K	カクラン		5.7	6.2	1.8	92.5	砂岩
272	石鍬	A5K	カクラン		5.1	7.5	2.0	117.7	砂岩
273	石鍬	B5K	キャット		5.2	6.2	3.1	116.5	砂岩
274	石鍬	B5K	カクラン		5.5	7.2	1.8	94.6	砂岩
275	石鍬	B5K	表面		5.5	6.6	2.2	110.4	砂岩
276	石鍬	B5K	キャット		5.4	6.6	2.1	111.4	砂岩
277	石鍬	B5K	カクラン		5.3	6.7	2.3	107.5	砂岩
278	石鍬	B5K	カクラン		3.7	6.3	1.4	45.0	砂岩
279	石鍬	B5K	カクラン		5.5	8.0	1.5	106.0	砂岩
280	石鍬	B5K	カクラン		6.5	7.3	3.1	139.3	砂岩
281	石鍬	A5K	キャット		4.3	5.1	1.6	41.9	砂岩
282	石鍬	B5K	カクラン		6.6	6.7	1.9	133.2	ホルンフェルス
283	石鍬	B5K	カクラン		4.3	5.7	1.8	57.1	砂岩

第6表 石鍬計測表(2)

通し番号	器種	出土地点	測定結果				石材	備考(報告書番号)	
			グリッド	周	最大径(cm)	最小径(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
284	石鐘	B5C	カクラン	4.5	9.7	2.2	97.5	ホルンフェルス	
285	石鐘	B5C	表振	5.2	-	2.3	111.7	ホルンフェルス	測定のため幅なし
286	石鐘	B5C	キャップ	5.4	6.5	1.5	76.9	砂岩	
287	石鐘	B5C	表振	4.7	4.9	1.8	57.6	砂岩	
288	石鐘	B5C	カクラン	6.0	7.8	2.1	140.9	ホルンフェルス	
289	石鐘	B5C	カクラン	5.3	6.6	1.6	75.6	ホルンフェルス	
290	石鐘	B5C	表振	6.1	9.3	2.1	164.2	ホルンフェルス	
291	石鐘	B5C	カクラン	4.6	5.4	2.3	77.7	ホルンフェルス	
292	石鐘	B5C	カクラン	5.0	6.0	1.5	66.2	砂岩	
293	石鐘	B5C	キャップ	5.3	5.3	-	65.2	砂岩	測定のため厚さなし
294	石鐘	B5C	カクラン	5.1	6.3	2.3	97.2	砂岩	
295	石鐘	B5C	表振	6.4	6.4	2.0	106.2	砂岩	
296	石鐘	B5C	キャップ	4.6	7.5	1.5	93.4	砂岩	
297	石鐘	B5C	表振	4.4	-	2.1	63.6	砂岩	
298	石鐘	A5C	キャップ	5.4	5.8	1.0	83.1	砂岩	
299	石鐘	B5C	カクラン	5.3	7.2	1.9	85.8	砂岩	
300	石鐘	B5C	カクラン	4.3	4.7	1.7	41.6	砂岩	
301	石鐘	B5C	キャップ	6.7	7.2	2.5	159.3	砂岩	
302	石鐘	B5C	表振	4.7	5.4	1.1	42.9	ホルンフェルス	
303	石鐘	B5C	カクラン	2.7	8.0	2.2	101.2	ホルンフェルス	
304	石鐘	B5C	キャップ	4.9	7.5	2.6	119.4	ホルンフェルス	
305	石鐘	B5C	キャップ	4.2	8.0	2.4	93.7	ホルンフェルス	
306	石鐘	B5C	表振	5.6	7.5	2.2	157.0	ホルンフェルス	
307	石鐘	B5C	カクラン	5.2	6.5	1.6	74.3	ホルンフェルス	
308	石鐘	B5C	キャップ	4.4	6.2	1.8	59.5	ホルンフェルス	
309	石鐘	B5C	カクラン	5.2	6.2	1.5	61.2	ホルンフェルス	
310	石鐘	B5C	カクラン	6.4	-	-	58.6	ホルンフェルス	割れのため幅、厚さなし
311	石鐘	A5C	キャップ	5.6	7.5	-	66.4	ホルンフェルス	測定のため厚さなし
312	石鐘	C6	表振	6.5	6.7	2.5	110.4	ホルンフェルス	
313	石鐘	B5C	キャップ	5.5	7.9	1.4	85.5	ホルンフェルス	
314	石鐘	B5C	カクラン	4.5	7.3	1.6	75.9	ホルンフェルス	
315	石鐘	B5C	表振	6.6	7.5	1.6	69.9	ホルンフェルス	
316	石鐘	B5C	表振	4.9	6.6	1.3	54.1	ホルンフェルス	
317	石鐘	B5C	カクラン	4.5	8.2	1.9	104.4	ホルンフェルス	
318	石鐘	B5C	カクラン	4.9	6.4	-	47.6	ホルンフェルス	
319	石鐘	B5C	カクラン	5.5	6.7	1.4	79.9	ホルンフェルス	
320	石鐘	B5C	カクラン	5.0	8.5	1.8	107.6	ホルンフェルス	
321	石鐘	B5C	カクラン	4.7	5.8	1.1	39.8	ホルンフェルス	
322	石鐘	B5C	キャップ	5.6	8.0	2.5	151.3	ホルンフェルス	
323	石鐘	B5C	カクラン	4.3	8.0	1.5	76.9	ホルンフェルス	
324	石鐘	B5C	カクラン	6.6	6.8	1.8	117.4	ホルンフェルス	
325	石鐘	B5C	カクラン	6.3	10.3	2.7	260.4	ホルンフェルス	
326	石鐘	B5C	表振	5.6	6.4	1.8	99.1	ホルンフェルス	
327	石鐘	B5C	カクラン	4.6	7.5	1.6	86.2	ホルンフェルス	
328	石鐘	B5C	カクラン	-	8.1	1.8	92.3	ホルンフェルス	割れのため長さなし
329	石鐘	B5C	キャップ	5.9	7.8	1.9	106.6	ホルンフェルス	
330	石鐘	B5C	カクラン	5.0	5.6	1.7	66.3	ホルンフェルス	
331	石鐘	B5C	キャップ	4.0	5.1	1.3	37.1	ホルンフェルス	
332	石鐘	B5C	カクラン	3.9	7.0	1.0	42.2	ホルンフェルス	
333	石鐘	B5C	キャップ	3.5	5.6	1.4	41.5	ホルンフェルス	
334	石鐘	B5C	キャップ	6.5	8.4	1.7	149.0	ホルンフェルス	
335	石鐘	B5C	カクラン	5.1	7.4	1.8	88.4	ホルンフェルス	
336	石鐘	B5C	カクラン	5.6	9.0	2.1	153.4	ホルンフェルス	
337	石鐘	B5C	キャップ	6.9	7.0	2.2	153.2	ホルンフェルス	
338	石鐘	B5C	キャップ	6.9	7.6	1.3	97.5	ホルンフェルス	
339	石鐘	B5C	表振	4.0	6.4	1.5	56.4	ホルンフェルス	
340	石鐘	B5C	キャップ	5.4	6.5	2.0	85.7	ホルンフェルス	
341	石鐘	B5C	キャップ	4.5	6.2	2.0	91.5	ホルンフェルス	
342	石鐘	B5C	カクラン	4.2	7.9	1.8	81.7	ホルンフェルス	
343	石鐘	B5C	カクラン	7.7	7.3	2.2	159.8	ホルンフェルス	
344	石鐘	B5C	カクラン	5.5	-	1.8	62.6	ホルンフェルス	割れのため幅なし
345	石鐘	B5C	カクラン	4.5	8.0	0.8	45.0	ホルンフェルス	

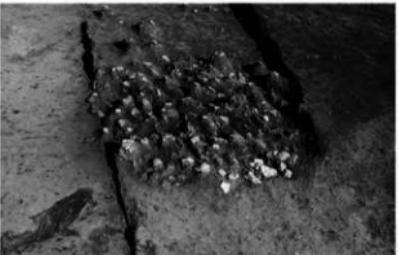
第7表 石鐘計測表(3)

通し番号	岩種	出力地点				注記番号	備考	
		グリッド	層	最高高さ(m)	最大幅(m)	最大厚さ(cm)		
346	打削石等	T-1	カクラン	12.2	5.5	2.5	212.0	カルシフェルス
347	削削石等	T-1	IV上	10.2	4.8	3.8	184.5	カルシフェルス
348	削削石等	T-1	カクラン	13.3	5.3	2.2	194.3	カルシフェルス
349	削削石等	B5C	カクラン	-	5.5	1.7	103.7	カルシフェルス
350	打削石等	B5C	カクラン	-	4.5	2.3	102.7	カルシフェルス
351	打削石等	C5	カクラン	14.4	5.5	2.5	203.9	カルシフェルス
352	打削石等	C5	IV上	9.8	4.2	1.7	93.1	カルシフェルス
353	打削石等	B5C	キャラクド	12.1	4.8	2.2	146.7	カルシフェルス
354	削削石等	C5	S82	12.0	6.5	1.7	125.5	カルシフェルス
355	打削石等	C5	S82	12.7	5.0	2.0	144.2	カルシフェルス
356	打削石等	C5	S84	11.4	6.2	1.7	150.8	カルシフェルス
357	削削石等	C5	S88	-	6.5	3.4	264.0	カルシフェルス
358	打削石等	B5C	キャラクド	11.0	5.8	2.0	203.4	カルシフェルス
359	打削石等	B4C	IV上	7.4	5.0	2.8	90.4	カルシフェルス
360	削削石等	B4C	IV上	11.2	6.7	4.8	558.0	尾崎山性別岩類
361	削削石等	B3	IV上	11.1	10.0	5.6	965.9	砂岩
362	削削石等	B4C	カクラン	8.7	7.6	3.9	389.7	砂岩
363	削削石等	B5C	カクラン	6.8	6.8	4.8	213.7	砂岩
364	削削石等	B5C	カクラン	8.2	7.1	4.2	366.9	福島山性別岩類
365	削削石等	B5C	IV	11.0	8.0	5.8	843.0	尾崎山性別岩類
366	削削石等	D1	IV	8.5	8.5	4.5	401.4	砂岩
367	削削石等	C5	V1	8.5	6.8	4.5	401.4	尾崎山性別岩類
368	削削石等	C5	IV上	11.0	6.0	3.0	307.7	砂岩
369	削削石等	C5	IV上	9.0	7.3	4.0	396.5	尾崎山性別岩類
370	削削石等	C2	S82	7.4	5.9	3.6	247.2	尾崎山性別岩類
371	削削石等	C2	S82	-	8.0	4.3	555.5	尾崎山性別岩類
372	削削石等	B5C	S82	10.5	6.0	4.0	412.5	尾崎山性別岩類
373	削削石等	T-1	IV上	6.7	6.5	2.0	308.8	尾崎山性別岩類
374	削削石等	T-1	IV上	10.2	9.5	4.7	705.7	砂岩
375	白石	B2C	V1	40.0	25.0	8.0	20000.0	尾崎山性別岩類
376	白石	C2	SA	22.0	20.0	9.0	5500.0	尾崎山性別岩類
377	白石	C2	SA	35.0	30.0	13.0	28500.0	尾崎山性別岩類
378	白石	C3	S82	35.0	33.0	9.0	20000.0	尾崎山性別岩類
379	石核	B5C	V1	10.9	5.8	5.7	383.3	カルシフェルス
380	石核	B5C	V1	5.5	1.0	1.0	5.5	カルシフェルス
381	削削片	C-1	IV上	5.2	4.5	1.6	22.8	カルシフェルス
382	削削片	T-2	IV	5.5	6.3	2.0	61.4	カルシフェルス
383	削削片	T-3	IV	4.4	1.8	1.0	4.4	カルシフェルス
384	削削片	T-3	IV	5.5	5.6	2.0	52.0	カルシフェルス
385	削削片	B2C	IV上	6.0	5.3	4.4	36.3	カルシフェルス
386	削削片	B3C	IV上	11.8	6.6	2.3	180.0	カルシフェルス
387	削削片	B3C	V	5.8	5.7	2.7	21.0	カルシフェルス
388	削削片	B3C	V	4.8	5.0	2.0	21.0	カルシフェルス
389	削削片	B3C	V	6.0	5.6	1.8	88.5	カルシフェルス
390	削削片	B3C	V	6.4	5.0	1.9	53.6	カルシフェルス
391	削削片	B6A	V1	6.5	5.5	2.0	67.1	カルシフェルス
392	削削片	B6A	V1	5.7	4.0	2.1	44.2	カルシフェルス
393	削削片	B6A	V1	2.3	1.3	1.0	2.2	カルシフェルス
394	削削片	B5C	V1	4.0	2.4	0.8	5.2	カルシフェルス
395	削削片	B5C	V1	4.5	3.9	1.8	31.8	カルシフェルス
396	削削片	B5C	V1	4.4	4.5	2.5	45.5	カルシフェルス
397	削削片	B5C	V	7.0	5.4	1.6	47.5	カルシフェルス
398	削削片	B5C	V	8.0	4.1	1.0	18.5	カルシフェルス
399	削削片	B5C	V	9.8	4.4	1.5	52.5	砂岩
400	削削片	B5C	V1	6.2	2.0	2.7	21.0	カルシフェルス
401	削削片	D1	V1	5.2	2.9	1.5	17.0	カルシフェルス
402	削削片	D1	V1	10.6	5.9	2.8	115.5	尾崎山性別岩類
403	削削片	D1	V1	2.2	2.2	2.5	5.5	砂岩
404	削削片	D3	V	8.6	8.0	2.9	281.0	カルシフェルス
405	削削片	D3	IV	6.9	4.2	0.9	28.8	カルシフェルス
406	削削片	D3	V	5.6	6.5	1.3	23.7	カルシフェルス
407	削削片	D41	V	4.2	4.7	1.0	24.3	カルシフェルス
408	削削片	D41	V	5.0	4.8	1.6	34.6	カルシフェルス
409	削削片	D52	V	9.3	4.7	2.7	24.6	砂岩
410	削削片	D53	V	7.4	5.9	3.5	80.8	カルシフェルス
411	削削片	D53	V	5.3	4.8	2.8	38.3	カルシフェルス
412	削削片	D54	V1	5.8	5.5	1.7	30.5	砂岩
413	削削片	D54	V1	4.9	3.1	1.3	18.1	カルシフェルス
414	削削片	D54	V1	4.2	2.5	1.3	11.4	カルシフェルス
415	削削片	D54	V1	2.8	2.5	0.9	7.7	カルシフェルス
416	削削片	D54	V1	1.9	7.4	2.8	207.1	カルシフェルス
417	削削片	D54	V1	10.2	4.1	2.2	192.1	カルシフェルス
418	削削片	D54	V1	1.9	7.4	2.2	19.1	カルシフェルス
419	削削片	D54	V1	8.1	5.7	2.3	94.9	カルシフェルス
420	削削片	D54	V1	8.4	2.3	2.2	37.9	カルシフェルス
421	削削片	D54	V1	6.2	4.6	1.8	42.6	砂岩
422	削削片	D54	V1	2.6	2.8	1.0	5.3	カルシフェルス
423	削削片	D54	V1	2.0	2.2	0.9	4.1	カルシフェルス
424	削削片	D54	V1	2.5	2.5	0.8	8.5	カルシフェルス
425	削削片	D54	V1	6.9	2.0	1.0	41.6	カルシフェルス
426	削削片	D54	V1	4.1	2.6	1.8	39.8	カルシフェルス
427	削削片	D54	V1	5.9	5.6	4.0	81.0	カルシフェルス
428	削削片	D54	V1	2.9	2.9	1.8	10.7	カルシフェルス
429	削削片	D54	V1	5.2	4.6	1.5	25.0	カルシフェルス
430	削削片	D64	V1	6.4	2.7	1.6	65.7	カルシフェルス
431	削削片	D52	V1	2.6	6.5	1.8	24.9	カルシフェルス
432	削削片	D52	V1	5.3	5.0	2.0	20.5	カルシフェルス
433	削削片	D51	V1	5.2	4.4	1.8	35.3	カルシフェルス
434	削削片	D51	V1	2.5	2.1	0.8	3.6	カルシフェルス
435	削削片	D43	X	5.6	6.8	3.6	168.1	カルシフェルス
436	削削片	D42	X	2.3	1.3	1.0	2.0	カルシフェルス
437	削削片	D31	X	3.1	2.2	1.4	9.5	カルシフェルス
438	削削片	D42	X	2.2	2.0	1.4	4.1	カルシフェルス
439	削削片	D51	X	5.3	5.3	1.6	21.7	カルシフェルス

第8表 未実測石器計測表



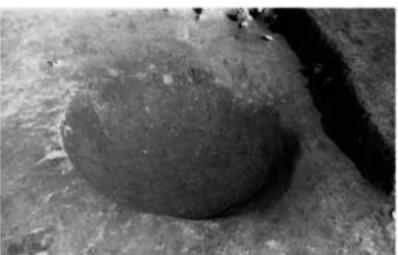
砾群 検出状況（北から）



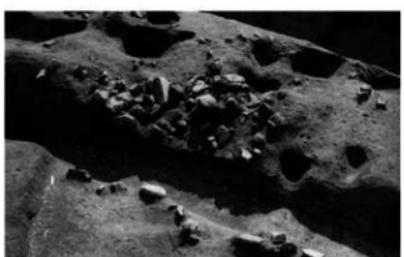
SI1 検出状況（南から）



SI1 配石検出状況（南から）



SI1 完掘状況（南から）



SI2 検出状況（北東から）



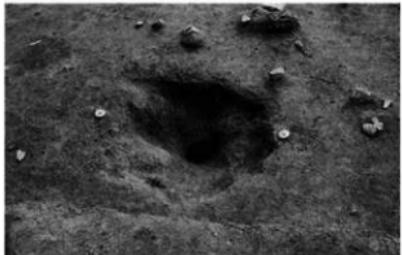
SI3 検出状況（北東から）



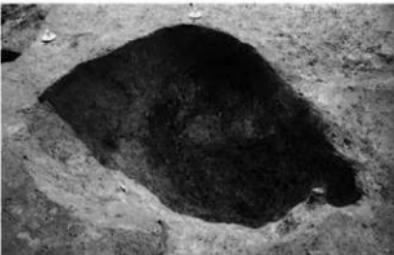
SI4 検出状況（東から）



SI2・3・4（右から）検出状況（東から）



SC1 完掘状況（西から）



SC2 完掘状況（東から）



SC3 完掘状況（東から）



SI5 検出状況（南から）



散礫 検出状況（南から）



SGA群 検出状況（北から）



SGB群 検出状況（南から）



SA1 遺物出土状況（南から）



SA1 完掘状況（南から）



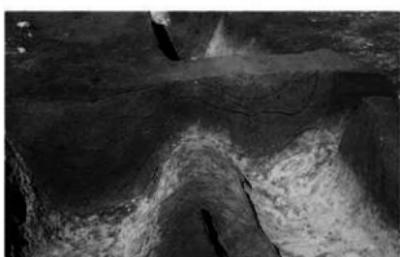
SE1・SE2 検出状況（東から）



SE1・SE2 完掘状況（直上）



SE2 豆出土状況（東から）



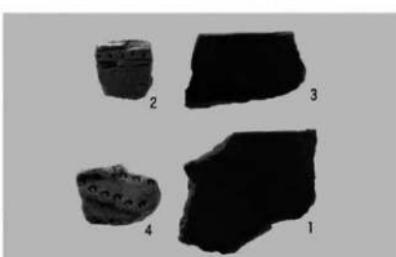
SE1・SE2 土層断面（東から）



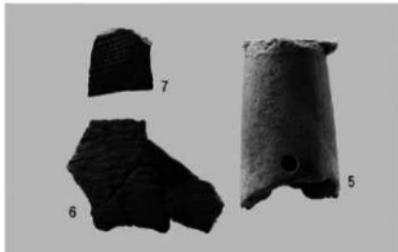
環状ピット群 完掘状況（北から）



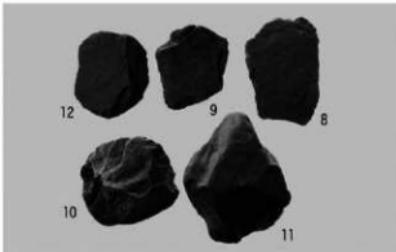
性格の不明な溝状遺構 完掘状況（南から）



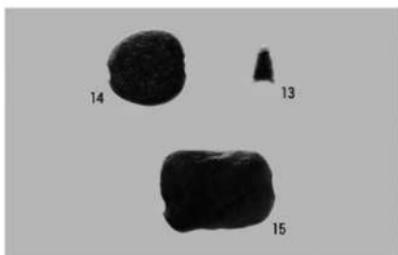
A区確認調査出土土器（1）



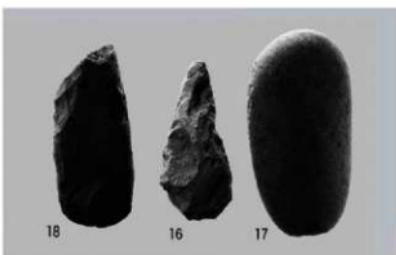
A区確認調査出土土器 (2)



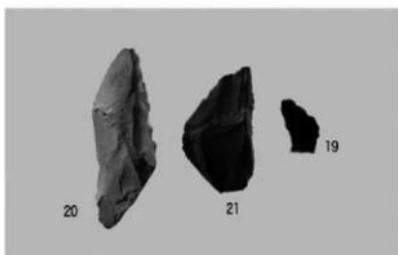
A区確認調査出土石器 (1)



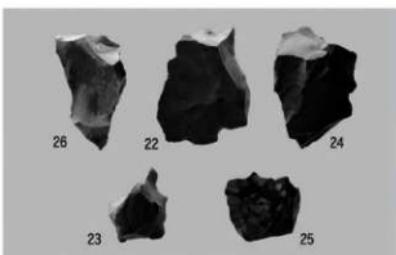
A区確認調査出土石器 (2)



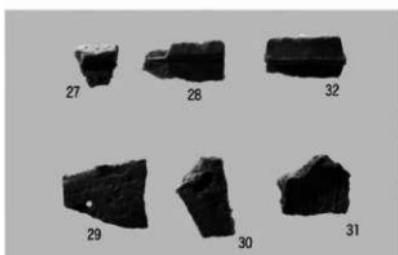
A区確認調査出土石器 (3)



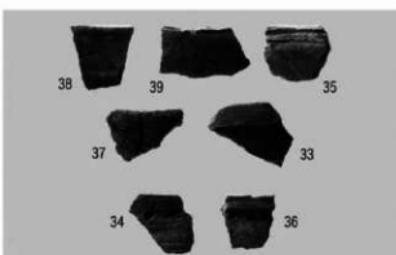
旧石器時代出土石器 (1)



旧石器時代出土石器 (2)



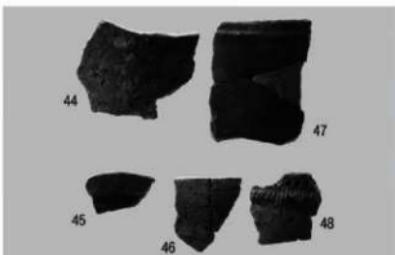
繩文時代出土土器 (1)



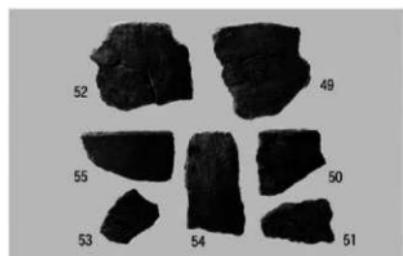
繩文時代出土土器 (2)



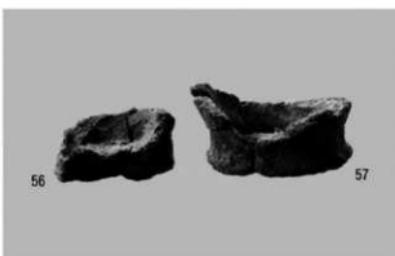
縄文時代出土土器（3）



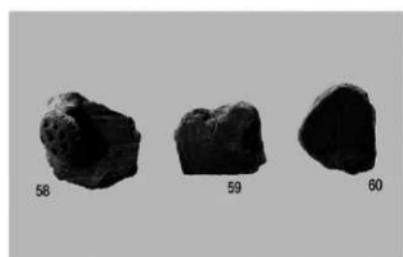
縄文時代出土土器（4）



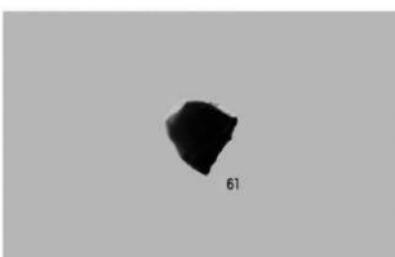
縄文時代出土土器（5）



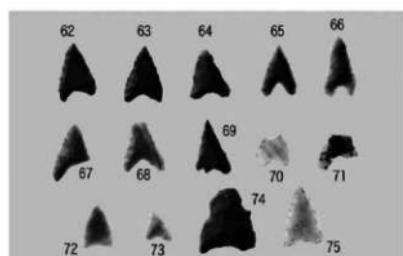
縄文時代出土土器（6）



縄文時代出土土器（7）



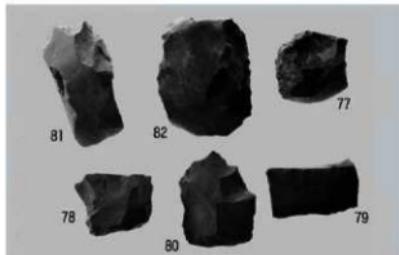
縄文時代出土石器（1）



縄文時代出土石器（2）



縄文時代出土石器（3）



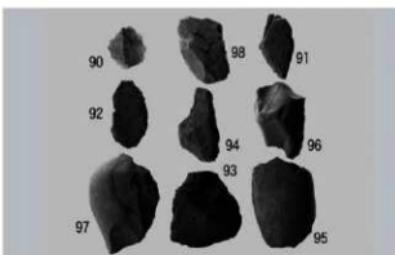
繩文時代出土石器（4）



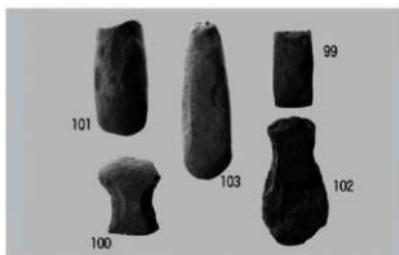
繩文時代出土石器（5）



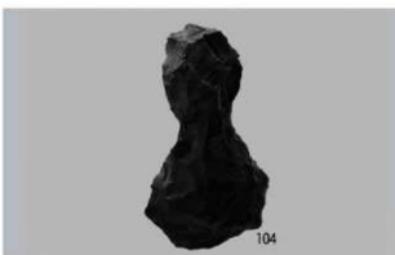
繩文時代出土石器（6）



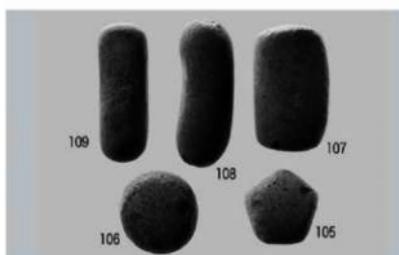
繩文時代出土石器（7）



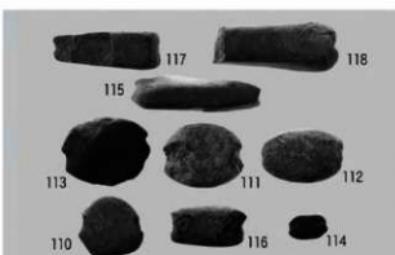
繩文時代出土石器（8）



繩文時代出土石器（9）



繩文時代出土石器（10）



繩文時代出土石器（11）